第４章　京都大学本部構内ＡＺ23区の発掘調査

千葉　豊　　辻本裕也*

１　調査の概要

本調査区は，京都大学本部構内の北西辺に位置し，吉田本町遺跡に含まれる（図版１－356･図156）。ここに，iCeMS研究実験棟の新営が計画されたため，周辺地域の調査成果を勘案して，発掘調査を実施した。工事予定地内に物理化学別館が存在していたため，この建物の北側をⅠ期調査（2009年７月13日～８月11日）として最初に発掘し，建物取り壊しが終了した後，工事予定地の南側部分をⅡ期調査（10月１日～11月６日）として，発掘を行なった。調査面積は，Ⅰ期245㎡，Ⅱ期465㎡で総計710㎡である。

本調査区の北に隣接する321地点では，近世の耕作遺構や弥生前期末の旧地表面が検出されており，今回の調査でも，こうした時代の遺構・遺物にとくに留意しつつ，遺跡の広がりと土地利用の変遷を明らかにすることを目的とした。

調査の結果，既存建物や管路などにかなりの部分が破壊されており，出土遺物は縄文時代から江戸時代まであわせて整理箱10箱を数えるにとどまったが，特筆すべき成果として，縄文晩期終末の平地式住居および７世紀前半，終末期古墳の周溝を検出した。

なお，縄文晩期～弥生前期の堆積環境を明らかにするために，パリノ・サーヴェイ株式会社に古環境分析を依頼し，その結果を第５節に掲載した。

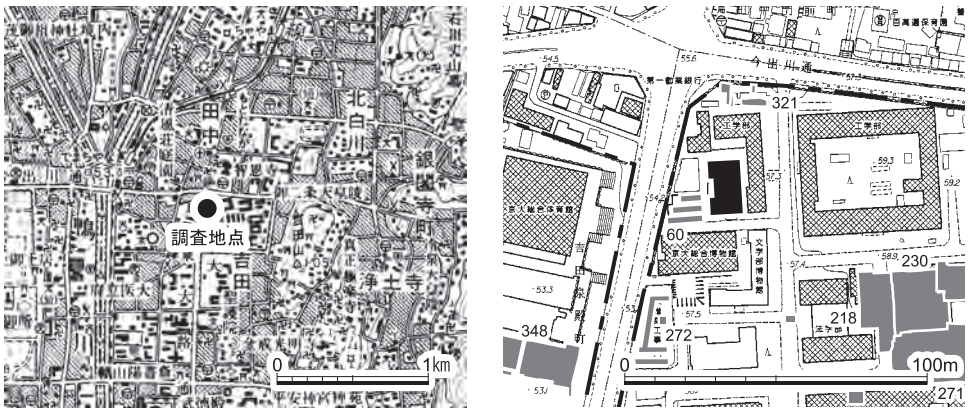


図156　本調査区の位置　縮尺：左1/5万，右1/2500

*パリノ・サーベイ株式会社

2　層　　位

黄色砂（第５層）より上の堆積物は，表土・攪乱により連続して確認することがほとんどできなっかたため，Ⅰ期調査区の北壁東辺で確認できた層位を模式図として図２に示し，黄色砂以下の堆積については，Ⅰ期調査区東西畔とⅡ期調査区南北畔の層位を図３に示して解説する。

基本的な層位は，表土（第１層），黒灰色土（第２層），黄色砂（第５層），黒褐色土（第６層），褐色砂質土（第７層），黄褐色シルト（第10層），灰白色砂礫（第11層）となる。

第２層の黒灰色土は，厚さ20㎝をはかる近世後半の遺物を含む耕作土。Ⅰ期調査区でおよそ半分，Ⅱ期調査区では全部が攪乱により失われていた。

黒灰色土以下黄色砂より上位において，調査区全域で面的に確認できた堆積物は存在しないが，黄色砂を掘り込む形で，茶褐色土（第３層）と灰褐色砂礫（第４層）が見つかっている。茶褐色土は中世の遺物を含む不定形土坑の埋土として確認された。本来調査区全域に堆積していたものが近世以降の開発により失われたものと推定できる。

第４層の灰褐色砂礫は，Ⅰ期調査区の東半を南北に延びる流路状の堆積物（図171）。茶褐色土が上に乗る部分が確認できたので，黄色砂堆積以後茶褐色土形成以前，すなわち弥生中期以降古代までである。遺物は出土していない。

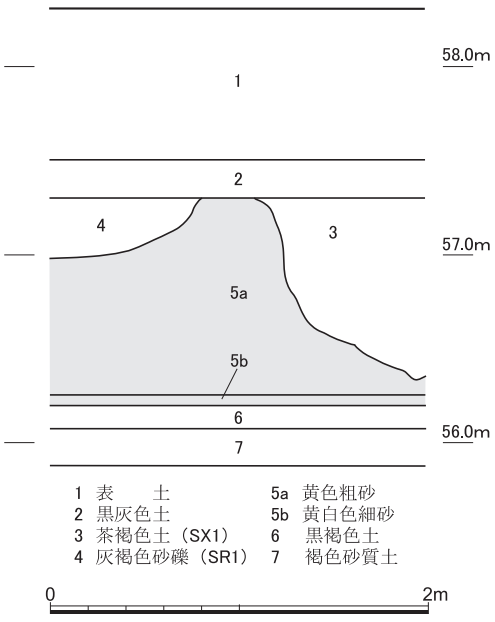


図157　Ⅰ期調査区層位模式図　縮尺1/40

第５層の黄色砂は吉田キャンパス一帯で広く見つかる弥生前期末の土石流堆積物。１ｍ前後の厚さで粗砂からなる５ａ層と厚さ５㎝前後のシルト～細砂からなる５ｂ層に細分できる。５ｂ層は存在しない部分もあり，その場所では５ａ層が下層を削り取る形で大きく凹むという特徴も認められる。北部構内ＢＤ28区などで見られたような土石流の通過痕跡と思われる〔冨井ほか2007〕。黄色粗砂から，縄文後期の土

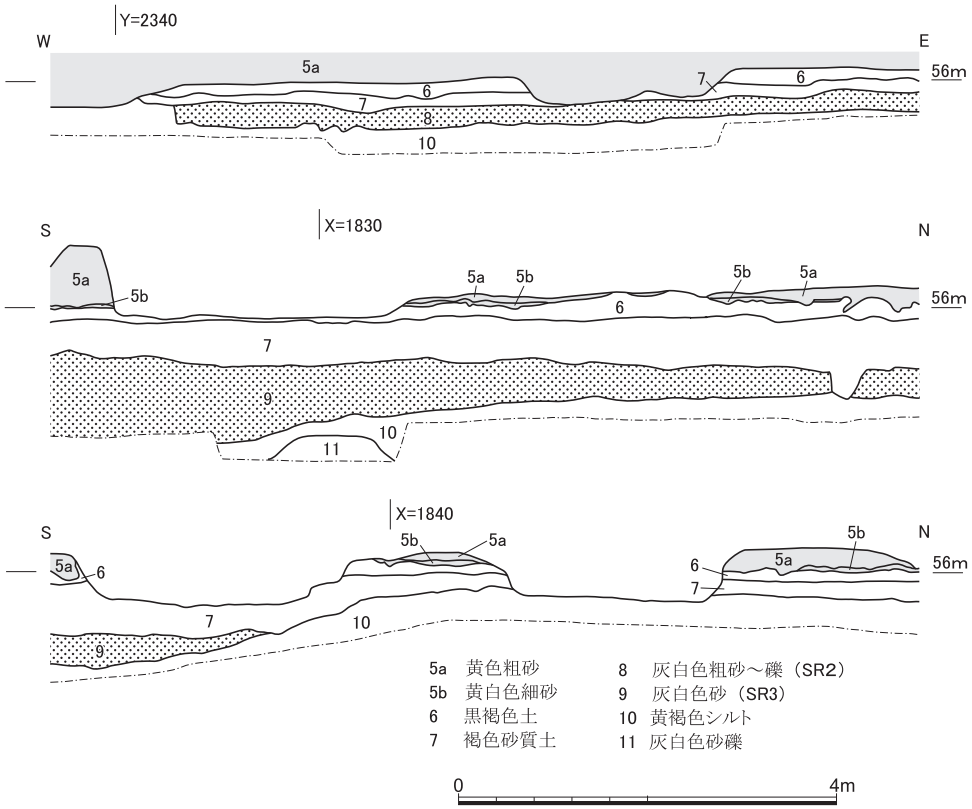


図158　Ⅰ期調査区東西畔，Ⅱ期調査区南北畔の層位　縮尺1/80

器（Ⅲ127）が１点見つかっている。

第６層の黒褐色土は，層厚10～20㎝の腐植に富む土壌。その上面は弥生前期末の旧地表面である。下層の堆積物の年代から，縄文晩期後半～弥生前期に形成された地層と理解できる。縄文晩期後半の土器を中心に，約860点の遺物が出土した。

第７層の褐色砂質土は，土壌化のあまり進行していない堆積物である。第６層との層界は不明瞭。第６層除去後，第７層上面を精査中に，縄文晩期中頃の土器（Ⅲ33，図版57－２）を検出しているので，晩期前半を中心とする堆積物と考える。

第10層の黄褐色シルトおよび第11層の灰白色砂礫は，遺跡の基盤をなす堆積物で遺物は出土しなかった。第10層の黄褐色シルトを掘り込んで２筋の流路状堆積物を確認した（第８層・第９層）。扇状地上を流れた網状流路の一部と見られる。ＳＲ２から縄文後期前葉～中葉ごろの遺物が出土しているので，縄文後期中葉～後葉と理解しておきたい。

3　先史時代の遺跡

⑴ 黄褐色シルト上面検出の遺構（図159）

第10層黄褐色シルト上面で，自然流路２筋を検出した。ＳＲ２はⅠ期調査区の北東隅から調査区中央を南西に向かって延び，Ⅱ期調査区の北西隅を通って調査区外へと続いている。埋土は灰白色の粗砂ないし礫。幅は６～８ｍ前後で，検出面からの深さは20㎝前後である。流路内から，縄文後期前葉～中葉の遺物が出土している（図版57－１）。

ＳＲ３は，Ⅱ期調査区の東南辺で確認した。ＳＲ２同様に，北東－南西に向かって西側の肩部を検出した。埋土は灰白色砂礫。幅は14ｍ以上で，検出面からの深さは最大で90㎝に達する。調査区外へと続き，東側の立ち上がりが確認できていないため，厳密には流路と認定することは困難であるが，ＳＲ２と走向や埋土がよく似ているため，自然流路と判断した。遺物は出土していない。

ＳＲ２，ＳＲ３は，同時期に北白川扇状地上を流れた網状流路の一部であろう。

⑵ 褐色砂質土上面検出の遺構（図版56・57－３～５，図160）

縄文晩期の遺物を多数包含する黒褐色土を除去し，褐色砂質土上面で焼土を伴なう黒褐色土の落ち込みを多数検出した。この落ち込みは，径30～50㎝前後の円形を呈するものが多く，とくにⅠ期調査区で密集して見つかった。このなかから，円形落ち込みの並びを復

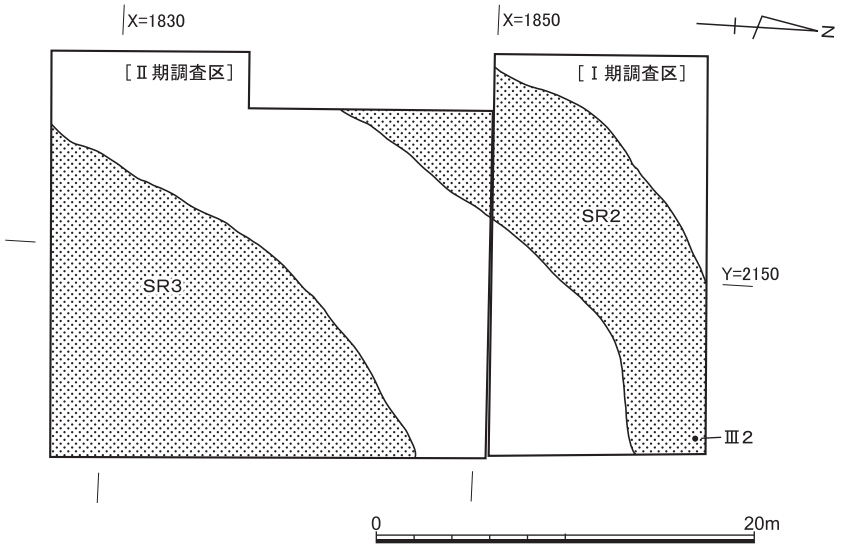


図159　黄褐色シルト上面検出の遺構　縮尺1/400

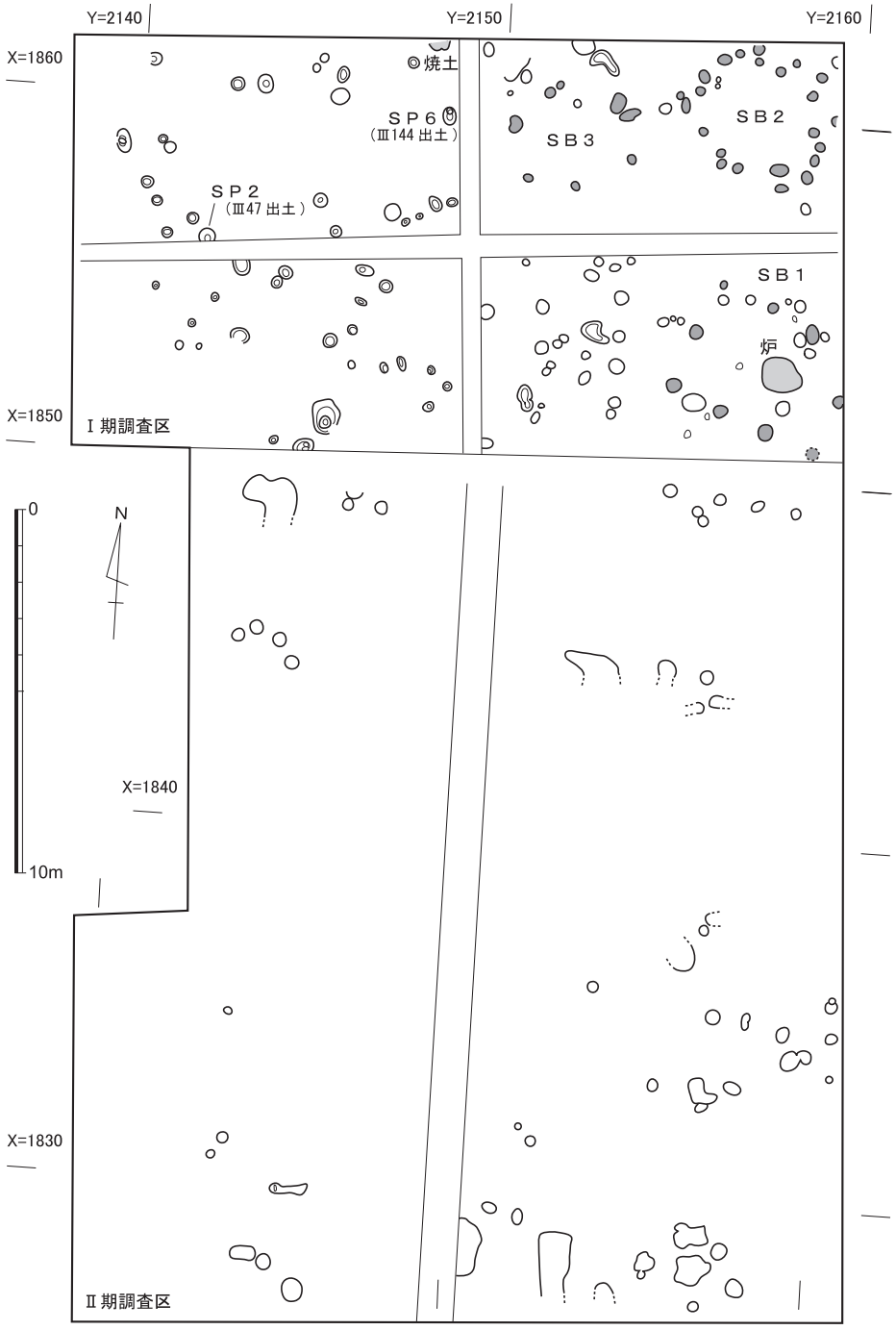


図160　褐色砂質土上面検出の遺構　縮尺1/200

元した結果，長方形住居のＳＢ１と円形住居のＳＢ２・ＳＢ３を認めることができた。

ＳＢ１　ＳＢ１はⅠ期調査区の南東隅に位置する。地床炉を伴なう２間×３間の住居。長辺が芯々で4.4m，短辺が芯々3.2mをはかる。長軸が東南東－西北西を向く。10個の柱穴のうち，北東側の１個は調査区外で検出できていない。検出面からの柱穴の深さは，浅いもので40㎝前後，深いもので60㎝前後である。

地床炉は中央やや東よりの地点でみられた。長辺方向に1.2m，短辺方向に１m前後，検出面からの深さ４～５㎝をはかる不整円形の落ち込み。ブロック状の焼土が詰まっていた。なお保存用サンプル（約350ml）採取後，焼土はすべて水洗選別を行なったが，微少な炭化材を除いて，種子などを検出することはできなかった。

ＳＢ２　Ⅰ期調査区北東辺，ＳＢ１の北側で検出した住居。30～40㎝前後の円形柱穴が東西４m，南北3.5m前後で円形にめぐる。柱穴が近接して並ぶので，建て替えなどを経ている可能性もある。

ＳＢ３　ＳＢ２の西側で検出した住居。30～40㎝前後の円形柱穴が東西3.5m，南北３m前後で円形にめぐっている。

これらの住居跡はいずれも褐色砂質土上面で見つかったピットの並びから復元しており，掘り込みの検出はできていない。包含層および埋土がともに黒褐色土であるため，実際には存在した掘り込みを確認できていない可能性も高いが，包含層（第６層黒褐色土）の厚みは，10～20㎝前後で，この上面は土石流に伴う初期洪水砂で覆われているため，土石流の通過痕跡を除けば，上面が削られている可能性はほとんどない。したがって，仮に掘り込みが存在したとしても10～20㎝までの浅いものであったと理解できる。

これらの遺構の所属時期は，第６層黒褐色土が縄文晩期後半～弥生前期までにおさまるため，その年代幅におさまることは確実である。また，後述するように弥生前期の遺物はほとんど出土しておらず，縄文晩期末の凸帯文土器が多数出土していることを勘案して，これらの遺構の所属時期は縄文晩期末（長原式）と理解する。

このほか，Ⅰ期調査区北壁中央付近でも焼土が見られ，Ⅰ期調査区西半にも円形ピットが多数見つかっているので，さらに住居が存在した可能性もあることを付け加えておく。

⑶ 弥生前期末の地表面（図版55，図161）

第５層黄色砂を除去してあらわれた第６層黒褐色土上面の地形を図161に掲げる。Ⅱ期調査区では，既存建物の基礎により失われている部分が大きいため，地形の特徴を読み取ることがやや困難であるが，56.3mの標高をもつ東北側が高く55.9mの標高となる南西側

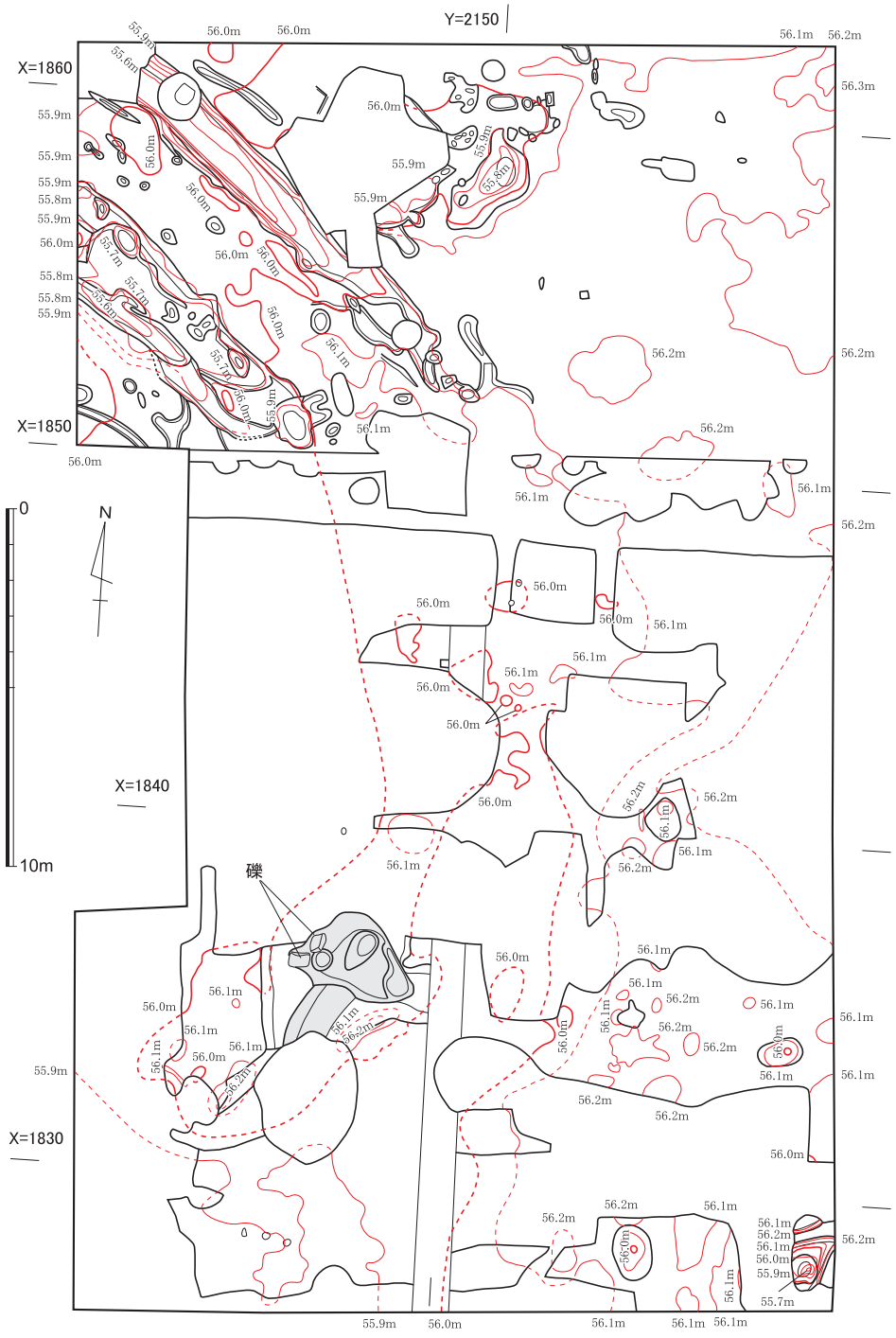


図161　黒褐色土上面の地形　縮尺1/200

へと傾斜していることが理解できる。

Ⅰ期調査区の西辺およびⅡ期調査区中央やや西よりの地点で，黄色粗砂（第５ａ層）が大きく落ち込む部分が認められた。Ⅰ期調査区の落ち込みは，南東－北西方向に延びる２筋の溝状の落ち込みで，2.5mの間隔をもって平行にはしっている。南東端は立ち上がって終わっているが，北西端は調査区外および攪乱により不明である。東側の落ち込みは最大幅1.5m，最大深さ0.4m，西側の落ち込みは最大幅２m，最大深さ0.3mである。いずれも黄色粗砂で埋まっているが，西側の落ち込みには底面に凹凸が見られるのに対して，東側の落ち込みの底面は平坦であるという差異が認められる。

Ⅱ期調査区で検出した落ち込みは，東西幅3.5m，南北は幅２mでいったん立ち上がった後，南側へ溝状の落ち込みが1.5m前後続くが，その先は攪乱により全長は不明である（図161，梨地）。検出面からの最大の深さは1.2mであるが，底面の凹凸が著しい。西側の肩部には，一抱えほどの大きさの花崗岩とホルンフェルスかとみられる礫がのっていた。

いずれの落ち込みも，下層の地層が削り取られており，黄色粗砂（第５ａ層）が直接埋めている点で共通する。Ⅱ期調査区の落ち込みは肩部に礫を残していること，南へ延びる落ち込みの形状などから，巨礫が樹木などに衝突して下層の堆積物を削り取りながら南へと移動していった，というような土石流の通過に関連する現象と想定すれば理解しやすい。しかし，Ⅰ期調査区の溝状落ち込みは，想定される土石流の走向にほぼ直行する方向で形成されていること，東側の落ち込みの底面が平坦であることなど，巨礫の通過痕跡と考えるには疑問が残る点もある。人為的な遺構であれば，洪水砂で埋積していることから，洪水発生直前（弥生前期末）に掘削された溝状遺構とも理解できるが，現状では判断は保留しておきたい。

⑷ 出土遺物（図版59～62，図162～168）

ＳＲ２出土土器（Ⅲ１・Ⅲ２）　Ⅲ１は細密条痕地に櫛状施文具による条線文が施される。暗褐色を呈し，胎土に角閃石を多量に含む。Ⅲ２は頸胴部の境に，帯縄文を横走させその下方に，曲線を描くと思われる帯縄文を配している。縄文は２段右撚縄文で充填施文である。これらは，縄文後期前葉北白川上層式２期前後のものであろう。

褐色砂質土出土土器（Ⅲ３～Ⅲ39）　Ⅲ３～Ⅲ５は縄文前期の土器。Ⅲ３は０段多条の２段左撚縄文を施す。Ⅲ４はＣ字形爪形文を２段施文する。胎土に角閃石を含む。北白川下層Ⅱｂ式。Ⅲ５は特殊凸帯文を施す北白川下層Ⅲ式。内外面ともに摩滅が著しい。

Ⅲ６はやや内傾する口縁部破片。枠状区画になるとみられる沈線を施し，その上下を末

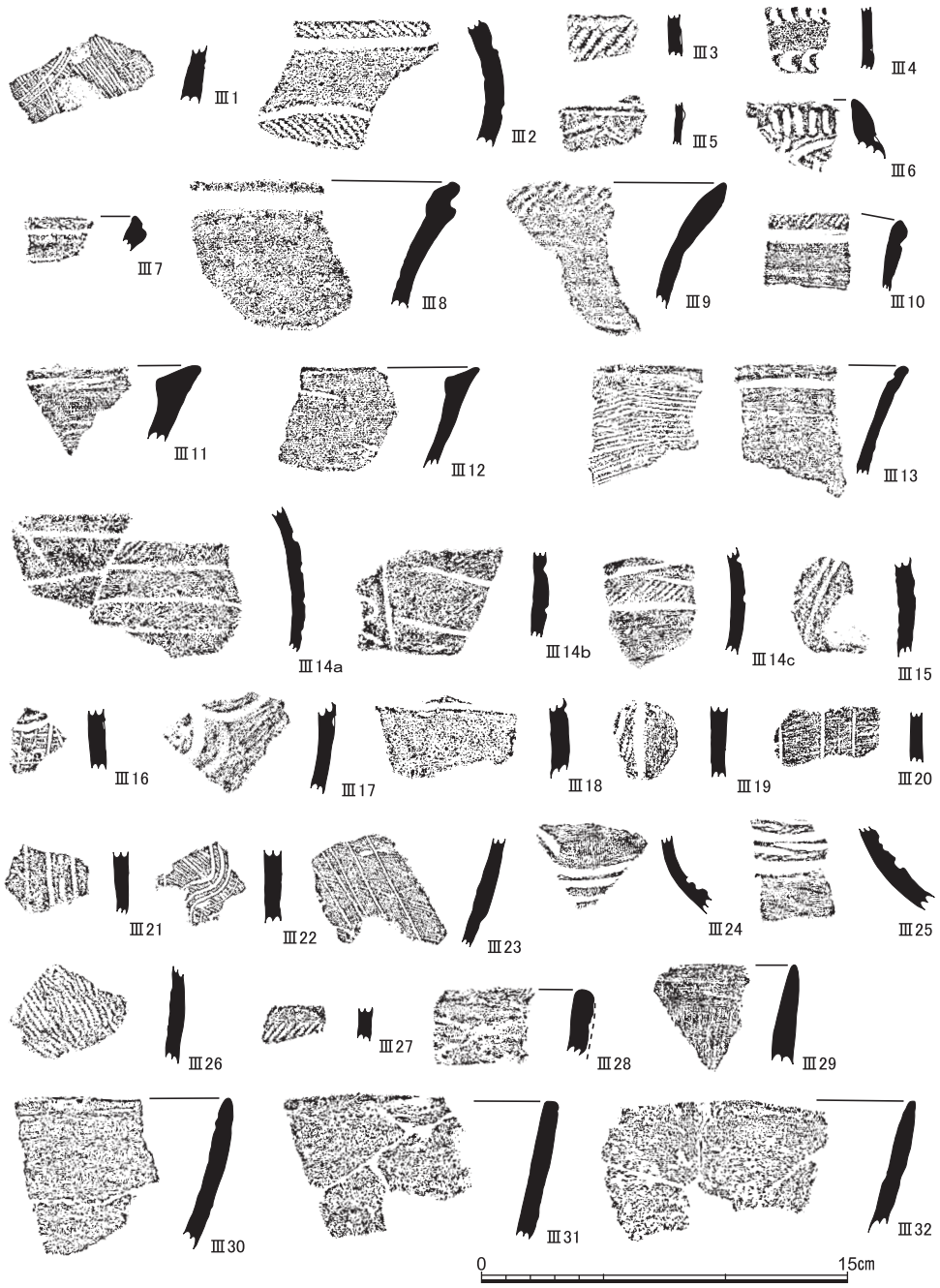


図162　ＳＲ２出土縄文土器（Ⅲ１・Ⅲ２後期），褐色砂質土出土縄文土器(1)（Ⅲ３～Ⅲ５前期，Ⅲ６中期，Ⅲ７～Ⅲ27後期，Ⅲ28～Ⅲ32後～晩期）　縮尺1/3

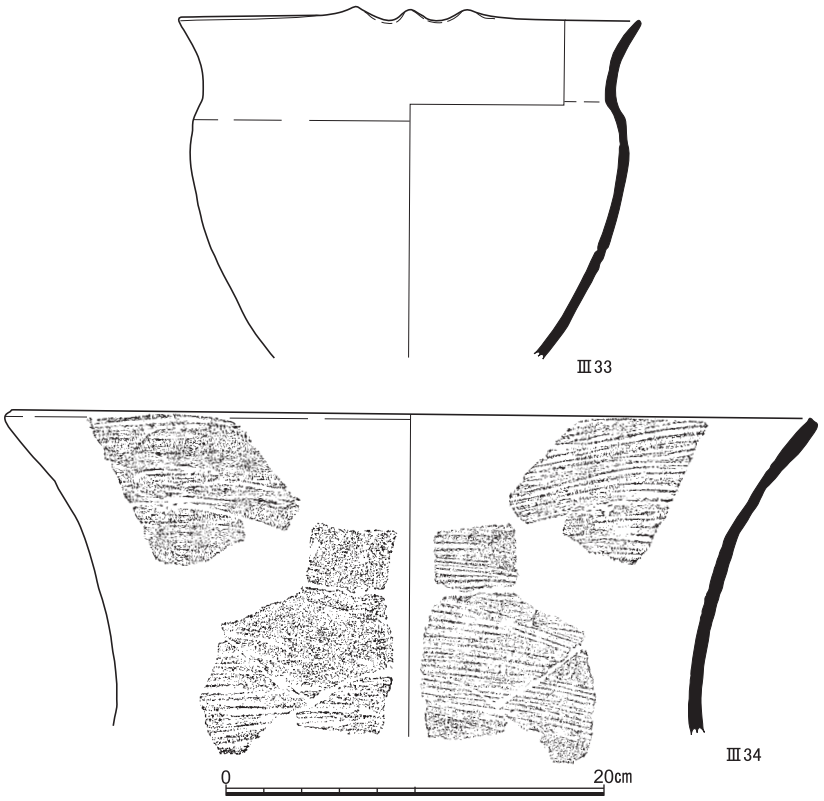


図163　褐色砂質土出土縄文土器(2)（Ⅲ33晩期，Ⅲ34後期）

端を刺突した短沈線で埋めて，２段右撚り縄文を施している。縄文中期末のものか。

Ⅲ７～Ⅲ27・Ⅲ34は縄文後期の土器。Ⅲ７は外面三角形状に肥厚する口縁部に沈線をめぐらし２段右撚縄文を施している。Ⅲ８は内側へ屈曲する口縁部に１条の沈線を横走させる。Ⅲ９・Ⅲ10は頸部無文の縄文地の土器。Ⅲ９は深鉢でわずかに肥厚する口縁部に２段左撚縄文を施文する。摩滅が著しい。Ⅲ10は鉢。口頸部の境を沈線で画し，口縁部に２段左撚縄文を施文する。Ⅲ９・Ⅲ10ともに暗褐色で胎土に角閃石を含む。Ⅲ11・Ⅲ12は口縁部内面が三角形状に肥厚する。内外面とも，Ⅲ11は磨き，Ⅲ12は丁寧な撫でで仕上げており，鉢ないしは浅鉢であろう。Ⅲ13は朝顔形を呈すると思われる深鉢。口頸部に櫛状施文具で条線文を横位に施文する。拓本左下に，条線の後から施された垂下する沈線の一部が見えている。口縁部内面にも沈線を横走させている。

Ⅲ14は同一個体の胴部破片３点からなる。２段左撚縄文からなる帯縄文を２段横位にめ

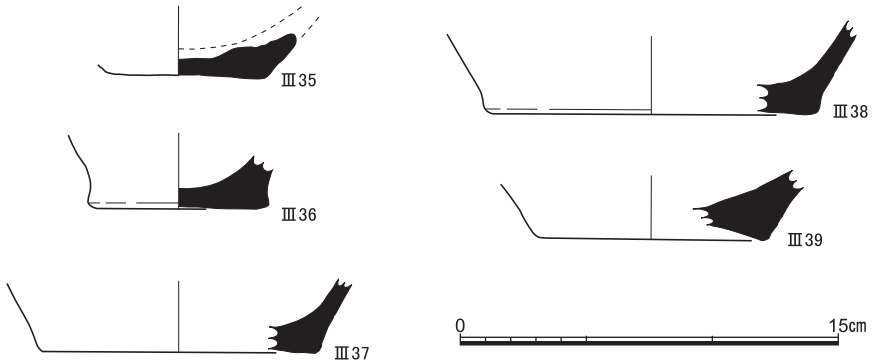


図164　褐色砂質土出土縄文土器(3)（Ⅲ35～Ⅲ39底部）　縮尺1/3

ぐらしている。Ⅲ14ｂには帯縄文を区切って蛇行沈線を配している部分が見えている。摩滅が著しい。Ⅲ15～Ⅲ21は沈線を施している胴部破片。Ⅲ17は沈線間に２段右撚縄文を充填している。Ⅲ17・Ⅲ20は暗褐色で角閃石を胎土に含む。Ⅲ15・Ⅲ18は摩滅が著しい。Ⅲ22・Ⅲ23は細密条痕地で，Ⅲ22は櫛状施文具，Ⅲ23は半截竹管状施文具で，条線文を施している。ともに，胎土に角閃石を含んでいる。Ⅲ24・Ⅲ25は傾きから判断して，壺あるいは注口土器の胴上部の破片か。Ⅲ24は胴上部に３条の沈線をめぐらし頸部にも沈線を施している。沈線内に，赤色顔料が付着する。Ⅲ25は胴上部に３条の沈線がめぐり，そこから沈線が垂下している。やや摩滅する。Ⅲ26・Ⅲ27は縄文施文の土器。ともに２段左撚縄文である。

Ⅲ28～Ⅲ34は無文土器の類。Ⅲ28～Ⅲ32は底部から口縁部までそのまま立ち上がる単純な器形になると思われる。Ⅲ29・Ⅲ30は口縁端部を尖り気味に仕上げている。

Ⅲ33は褐色砂質土上面を精査中に発見した深鉢。底部を欠くが，口縁部から胴下部まで３分の１前後残存している。復元口径24.2㎝，器高は推定22㎝前後となろう。頸部が外反し胴部が張る形態で，内外面ともに撫でて仕上げている。水平口縁に山形の突起が３個とりついている。

Ⅲ34は復元口径42.6㎝をはかる大型の深鉢。内外面ともに，横位の巻貝条痕で仕上げている。口縁端部は面取りを施している。

Ⅲ35～Ⅲ39は土器底部。Ⅲ35～Ⅲ38は平底で，Ⅲ35・Ⅲ37は底縁からそのまま外へ向かって開くのに対して，Ⅲ36・Ⅲ38はいったん上方へ立ち上がった後，外へ開く。Ⅲ39は褐色砂質土上面で検出。底縁から中央に向かって立ち上がる凹底である。

褐色砂質土から出土した縄文土器の年代は，Ⅲ３～Ⅲ５は前期，Ⅲ６は中期末の可能性

がある。Ⅲ７～Ⅲ27・Ⅲ34は後期の土器で，後期後葉の元住吉山式の粗製土器であるⅢ34を除けば，後期前葉～中葉の北白川上層式が主体をしめると理解する。ただし，Ⅲ24・Ⅲ25は異例な作りで，異なる時期のものかもしれない。Ⅲ33は晩期中葉の篠原式に比定できる。

黒褐色土出土土器（Ⅲ40～Ⅲ126）　Ⅲ40はＣ字形爪形文を施す。縄文前期，北白川下層Ⅱｂ式。Ⅲ41・Ⅲ42は縄文中期の土器で，Ⅲ41は撚りの粗い独特な縄文を施す船元Ⅰ～Ⅱ式。Ⅲ42は口頸部の境に２段左撚縄文を施し頸部以下に沈線を垂下させる。中期末の北白川Ｃ式。Ⅲ43～Ⅲ56は縄文後期の土器。Ⅲ43・Ⅲ44はともに摩滅が著しい。口縁下に沈線をめぐらしており，初頭の中津式～福田Ｋ２式ごろか。Ⅲ45は屈曲する口縁部に沈線を３条めぐらし２段左撚縄文を充填する。暗褐色で胎土に角閃石を含む。北白川上層式２期。Ⅲ46～Ⅲ56は頸胴部資料で，沈線文（Ⅲ46～Ⅲ50），櫛状施文具による条線文（Ⅲ52～Ⅲ56），条線文＋沈線文（Ⅲ51）を施文している。おおむね縄文後期前葉の北白川上層式のものであろう。

Ⅲ57は口縁部を４条の沈線が横走しており，残存する最下段の沈線付近で屈曲するようである。後期末の滋賀里Ⅰ式前後の土器か。Ⅲ58は頸部を二枚貝条痕で調整し面取りした口唇部に刻みを施す。晩期中葉の篠原式。Ⅲ59は内湾する浅鉢形の器形を呈する。隆線表現で，工字あるいは，網状のモチーフを描いている。東日本の浮線網状文土器であり，離山式に比定できる〔中沢1998〕。

Ⅲ60～Ⅲ80・Ⅲ82～Ⅲ108は，縄文晩期末の凸帯文土器で，黒褐色土出土土器の主体をしめるものである。図化しうる資料はすべて掲載した。

口縁部資料であるⅢ60～Ⅲ80は以下の４つに分類できる。

ａ類（Ⅲ60～Ⅲ73）：口縁端部に接するように凸帯を貼り付け凸帯上に刻みを加える。

口縁部内面と凸帯上部を同時に横なでしたため，口唇部は尖り凸帯は垂れ下がった三角形状のものが主体をしめる。刻みはＤ字状あるいはＶ字状となるが，軽い刻みのものが多い。Ⅲ68・Ⅲ70は暗褐色を呈し胎土に角閃石を含む。Ⅲ67・Ⅲ71は凸帯貼り付け前に，刷毛目状原体による縦方向の調整が施されている。

ｂ類（Ⅲ74・Ⅲ75）：口縁部の凸帯が２条となるもの。

ともに２条の凸帯を口縁下に接するように貼り付けて，軽いＤ字刻みを施す。Ⅲ74の外面には縦方向の擦痕がわずかに観察できる。口縁部に２条の凸帯がつくものは，京都大学構内では，北部構内ＢＦ34区〔千葉1998，Ⅰ43〕，北部構内ＢＣ28区〔伊藤ほか2005，Ⅱ

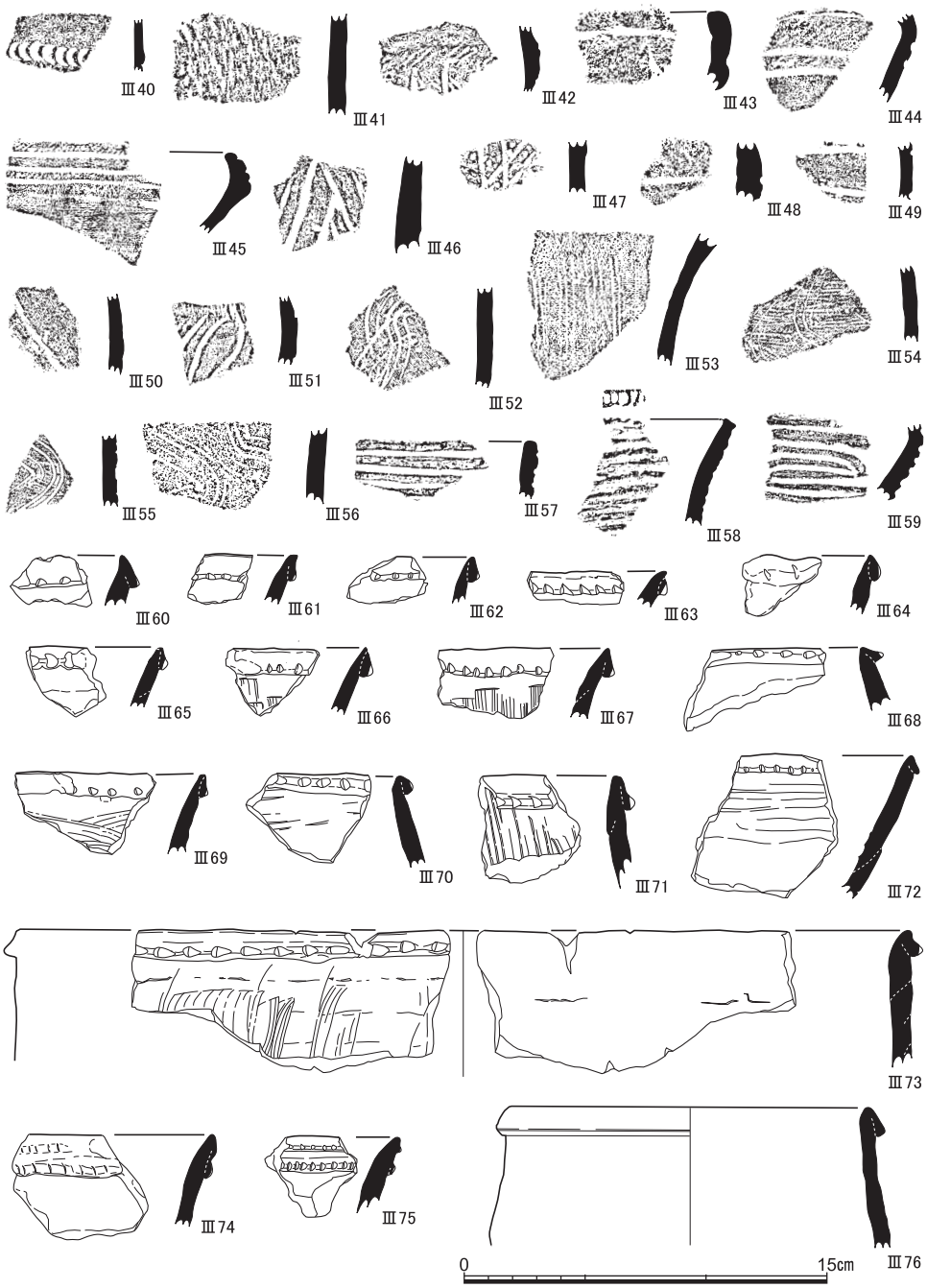


図165　黒褐色土出土縄文土器(1)（Ⅲ40前期，Ⅲ41・Ⅲ42中期，Ⅲ43～Ⅲ57後期，Ⅲ58～Ⅲ76晩期）
縮尺1/3

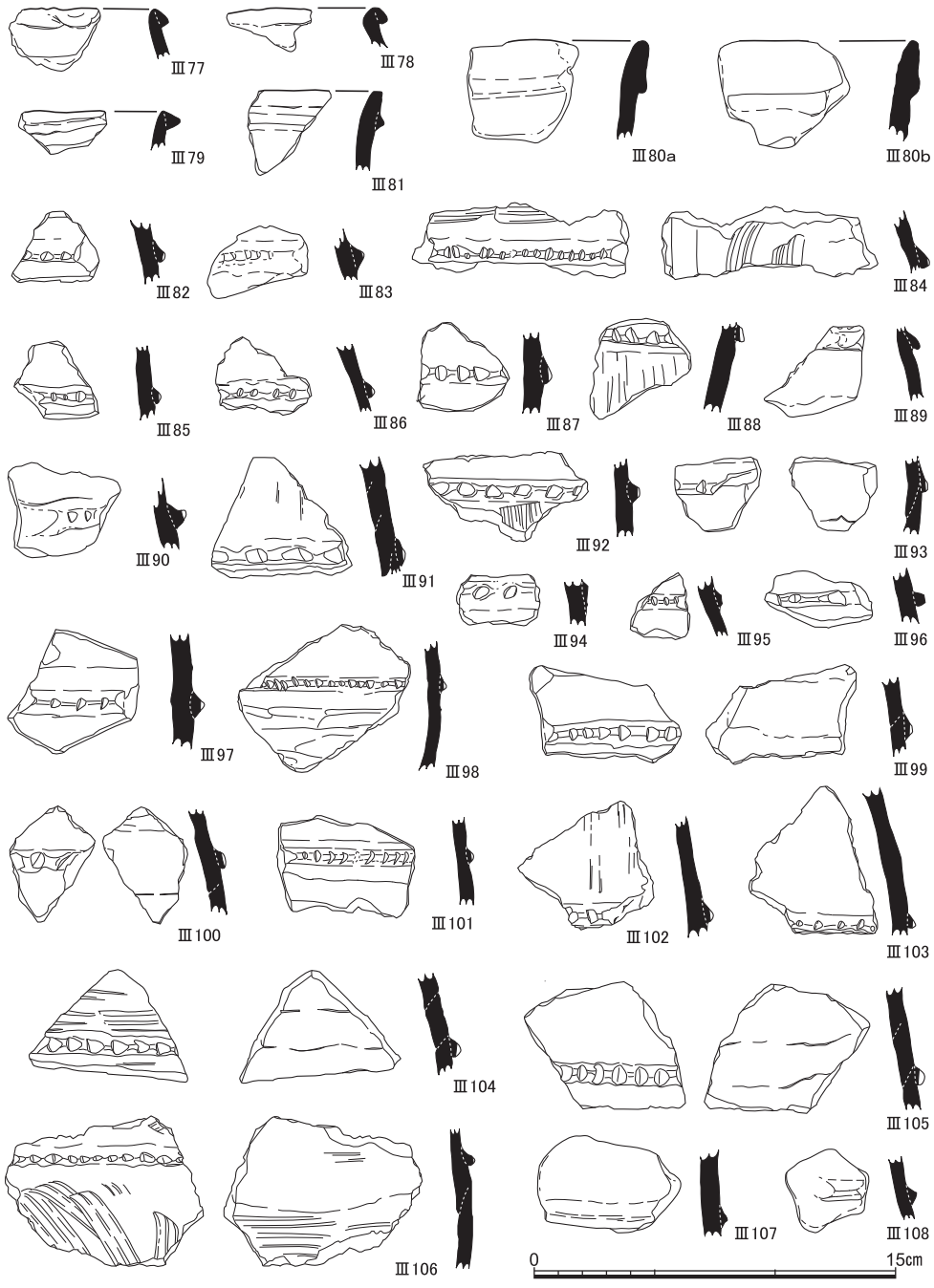


図166　黒褐色土出土縄文土器(2)（Ⅲ77～Ⅲ108晩期）　縮尺1/3

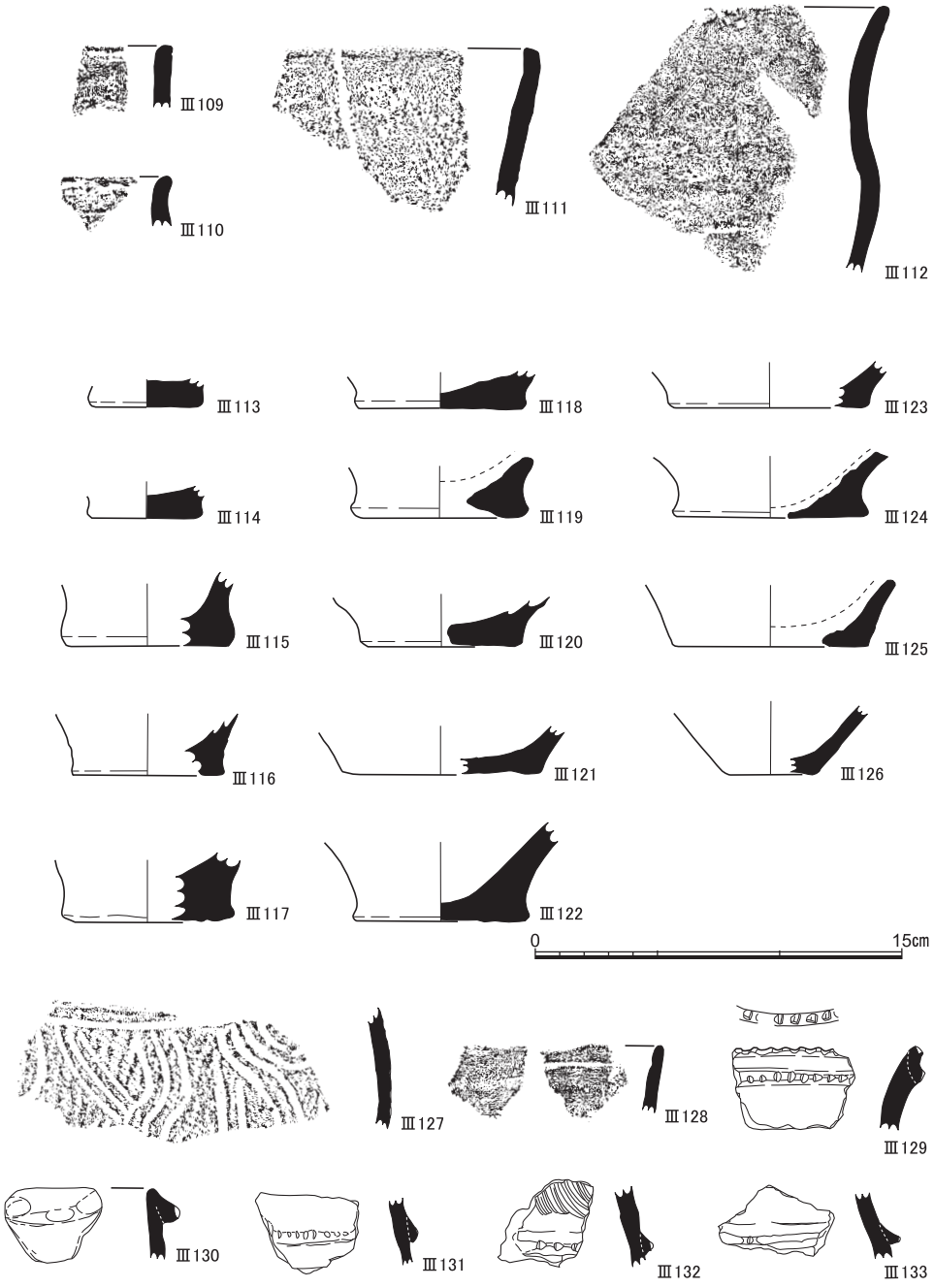


図167　黒褐色土出土縄文土器(3)（Ⅲ109～Ⅲ112後～晩期，Ⅲ113～Ⅲ126底部），黄色砂出土縄文土器（Ⅲ127後期），歴史時代層出土縄文土器（Ⅲ128後期，Ⅲ129～Ⅲ133晩期）　縮尺1/3

32・Ⅱ38〕に類例がある。

ｃ類（Ⅲ76～Ⅲ79）：口縁部に接するように無刻みの凸帯を貼り付ける。

Ⅲ76・Ⅲ77・Ⅲ78はａ類同様，口縁部内面と凸帯上部を同時に横撫しているため，凸帯が垂れ下がった形状を示す。Ⅲ76・Ⅲ78は暗褐色で胎土に角閃石を含んでいる。Ⅲ79は断面三角形の背の高い凸帯をもつ。

ｄ類（Ⅲ80）：同一個体２点。直立する。口縁部から垂れ下がるように凸帯を貼り付け，凸帯が段状を呈している。摩滅が著しく刻みの有無は不明。橙褐色を呈する。

ｅ類（Ⅲ81）：口縁端部からやや下がった位置に無刻みの断面三角形の凸帯をもつ。口頸部は外反する。口縁端部を面取りしている。

Ⅲ82～Ⅲ108は胴部。有刻凸帯（Ⅲ82～Ⅲ106）と無刻凸帯（Ⅲ107・Ⅲ108）が認められるが，前者が多い。胴部に凸帯をもつ土器は，基本的に２条凸帯文と判断でき，口縁部と胴部の出土点数から判断しても，凸帯文土器の多くは２条凸帯文と理解できる。有刻凸帯の刻みは，口縁部の刻み同様，Ｄ字やＶ字の軽いものが多いが，Ⅲ104・Ⅲ105のようなしっかりしたＤ字刻みもある。Ⅲ101は暗褐色で胎土に角閃石を含む。

これらの凸帯文土器の年代は，①口唇部を刻んでいるものが存在しない，②２条凸帯文深鉢が主体をしめる，③口縁端部に接するように凸帯を貼り付けているものが多い，④凸帯上の刻みが軽いものが多いなどから，縄文晩期末の長原式に比定できるものが多く，Ⅲ80・81は長原式の新相あるいは長原式直後とされる土器に類似する。

Ⅲ109～Ⅲ112は無文粗製土器。Ⅲ111は寸胴形，Ⅲ112は頸部が外反する。

Ⅲ113～Ⅲ126は土器底部。底径4.5㎝前後（Ⅲ113･Ⅲ114）から，底径８㎝前後（Ⅲ125）までみられる。Ⅲ126は内外面を磨いており，鉢ないしは浅鉢の底だろう。Ⅲ119は底部内面が円盤状に剝離している。

黄色砂出土土器（Ⅲ127）　２条の沈線で頸胴部を画し，胴部に２段左撚縄文を施した後，２～３条単位の沈線を弧状に配している。縄文後期，北白川上層式１期。

歴史時代層出土土器（Ⅲ128～Ⅲ133）　攪乱や歴史時代の遺構・包含層から出土した縄文土器を解説する。Ⅲ128はやや外傾する口縁部で，口縁内面に浅い沈線が１条めぐっている。後期後葉の土器か。Ⅲ129～Ⅲ133は晩期末の凸帯文土器。Ⅲ129は凸帯上にＤ字刻み，面取りした口唇部には角棒状の原体による刻みを施す。Ⅲ130は口唇部に接するように断面三角形状の凸帯がつき，横長のＯ字状刻みが施される。Ⅲ131～Ⅲ133は胴部資料。いずれも，凸帯上側の強い横撫でのため垂れ下がった形状で，小Ｄ・小Ｖ字刻みが施

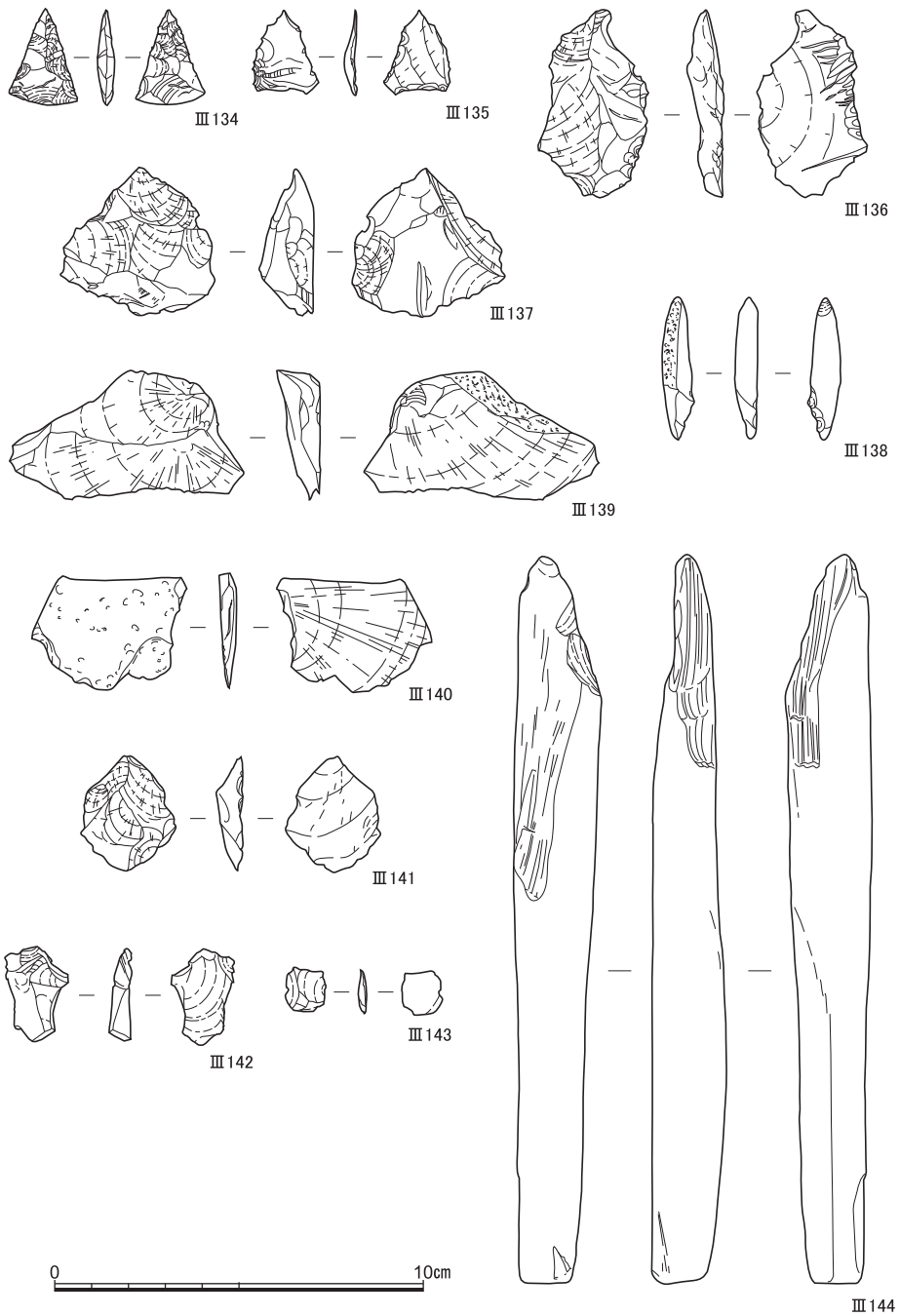


図168　石器(1)（Ⅲ134石鏃，Ⅲ135石鏃未製品，Ⅲ136スクレーパー，Ⅲ137石核，Ⅲ138石錐未製品？，Ⅲ139～Ⅲ143剝片，Ⅲ144棒状石製品）

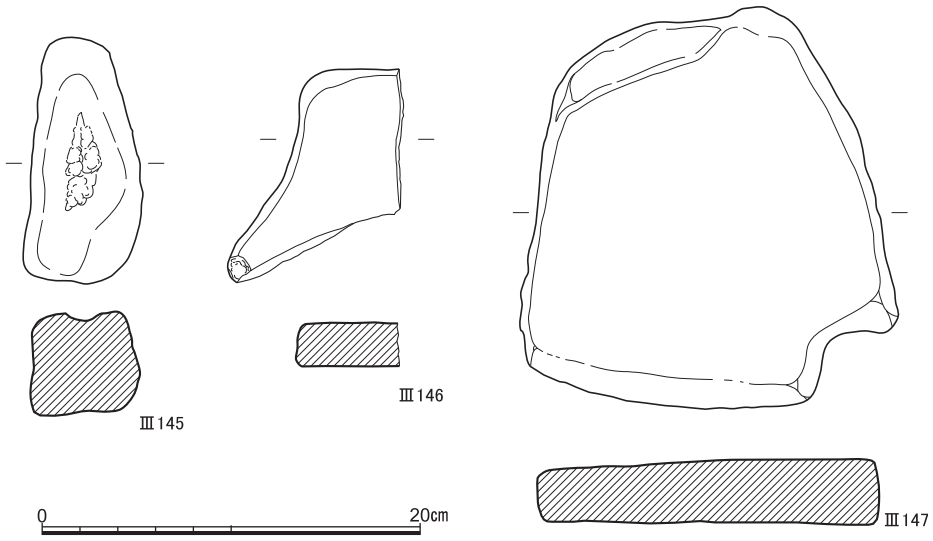


図169　石器(2)（Ⅲ145凹石，Ⅲ146・Ⅲ147台石）

されている。Ⅲ129は滋賀里Ⅳ式に比定でき，残りは長原式に対比できる。

出土石器（Ⅲ134～Ⅲ147）　　Ⅲ144はＳＰ６，Ⅲ145･Ⅲ147は褐色砂質土出土。残りは，黒褐色土出土。

Ⅲ134は平基式の石鏃。重量1.6ｇ。Ⅲ135は平面三角形を呈する剝片。側縁の一部に細部調整が見られるが，主剝離面を大きく残し石鏃製作途上品と判断する。0.9ｇ。Ⅲ136はつまみ状の突起を作り出し細部調整が施されているスクレーパー。11.2ｇ。Ⅲ137は残核。20.6ｇ。Ⅲ138は一部に原石面を残す棒状の剝片。先端部に細部調整が見られる。石錐製作途上品か。2.1ｇ。Ⅲ139～Ⅲ143は剝片類。Ⅲ139・140は原石面を一部に残す。Ⅲ139は15.4ｇ，Ⅲ140は7.8ｇ，Ⅲ141は3.8ｇ，Ⅲ142は1.9ｇ。Ⅲ143は0.3ｇ。Ⅲ134～Ⅲ143の石材はいずれもサヌカイトで，肉眼観察ではⅢ134・Ⅲ135・Ⅲ139・Ⅲ142・Ⅲ143は金山，Ⅲ136・Ⅲ137・Ⅲ138・Ⅲ140・Ⅲ141は二上山と判断される。

Ⅲ144は，粘板岩製の棒状石製品。上端は折損しているが，下端部は平坦面を形成している。折損面も含めて摩滅（水磨？）しており，加工の痕跡を読み取ることは困難であるが，石剣・石棒類の素材の可能性がある。現存長19.8㎝，最大幅2.3㎝。重量120.5ｇ。

Ⅲ145は花崗岩製の凹石。表面が敲打により凹んでいる。613.1ｇ。Ⅲ146･Ⅲ147は台石。Ⅲ146は大半を欠損するが，表裏面ともに磨面となる。石英斑岩製か。295.6ｇ。Ⅲ147は砂岩製で，1526ｇ。

遺物の分布状況　以上，先史時代に属する主要な遺物について解説を加えたが，遺物の出土状況について，ここで簡単にふれておきたい。

層位別の出土点数は，ＳＲ２が10点，褐色砂質土が324点，黒褐色土が862点，黄色砂が８点，それ以外が32点である。このなかから，型式判別可能で図化しうる遺物に関しては，すべての資料を掲載した。出土遺物は，図170に掲げた地区割りに従って取り上げており，掲載遺物の出土地区および出土層位については，表17にまとめてある。

この表を一瞥すると，褐色砂質土および黒褐色土のどちらの層位においても，調査面積の広いⅡ期調査区よりもⅠ期調査区から，より多くの遺物が出土していることが読み取れる。Ⅱ期調査区は，建物基礎により下層まで攪乱されていた部分が大きかったという状況を考慮する必要はあるけれども，Ⅰ期調査区の位置する北側に遺物分布の中心があるとみてよいだろう。

さらにⅠ期調査区の黒褐色土出土遺物を地区別にみてみると，Ｓ１区がもっとも多く，Ｎ２区，Ｎ１区，Ｓ２区となり，Ⅰ期調査区の東半分に７割前後の遺物が出土していることになる。Ｓ１区にはＳＢ１，Ｎ１区にはＳＢ２，Ｎ２区にはＳＢ３が見つかっており，遺構と遺物の分布が対応していると理解してよいだろう。

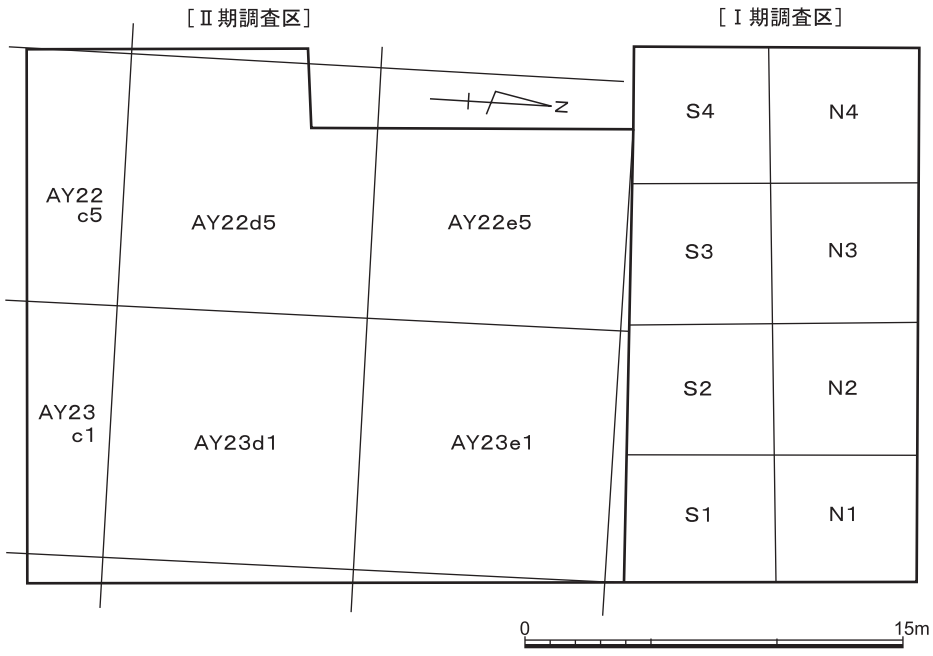


図170　遺物の取り上げ地区　縮尺1/300

表17　出土地区一覧

番号	調査	出土地区	遺構・層位	番号	調査	出土地区	遺構・層位	番号	調査	出土地区	遺構・層位
Ⅲ1	Ⅰ期	N1	SR2	Ⅲ49	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ98	Ⅰ期	S4	黒褐色土
Ⅲ2	Ⅰ期	N1	SR2	Ⅲ50	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ99	Ⅰ期	N3	黒褐色土
Ⅲ3	Ⅰ期	N1・2	褐色砂質土	Ⅲ51	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ100	Ⅰ期	S4	黒褐色土
Ⅲ4	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ52	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ101	Ⅰ期	S1＋S2	黒褐色土
Ⅲ5	Ⅰ期	N2	褐色砂質土	Ⅲ53	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ102	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ6	Ⅱ期	AY22c5	褐色砂質土	Ⅲ54	Ⅰ期	S2	黒褐色土	Ⅲ103	Ⅰ期	N4	黒褐色土
Ⅲ7	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ55	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ104	Ⅰ期	S4	黒褐色土
Ⅲ8	Ⅰ期	N1・2	褐色砂質土	Ⅲ56	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ105	Ⅰ期	S4	黒褐色土
Ⅲ9	Ⅰ期	N1・2	褐色砂質土	Ⅲ57	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ106	Ⅰ期	N4	黒褐色土
Ⅲ10	Ⅰ期	S3	褐色砂質土	Ⅲ58	Ⅰ期	N1・S1		Ⅲ107	Ⅱ期	AY22d5	黒褐色土
Ⅲ11	Ⅰ期	N1・2	褐色砂質土	Ⅲ59	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土	Ⅲ108	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土
Ⅲ12	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ60	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ109	Ⅱ期	AY23e1	黒褐色土
Ⅲ13	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ61	Ⅰ期	N4	黒褐色土	Ⅲ110	Ⅰ期	N2	黒褐色土
Ⅲ14a	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土	Ⅲ62	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ111	Ⅰ期	N1	黒褐色土
Ⅲ14b	Ⅱ期	AY22c5	褐色砂質土	Ⅲ63	Ⅰ期	N3	黒褐色土	Ⅲ112	Ⅱ期	AY22d5	黒褐色土
Ⅲ14c	Ⅱ期	AY22c5	褐色砂質土	Ⅲ64	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土	Ⅲ113	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土
Ⅲ15	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ65	Ⅰ期	S3	黒褐色土	Ⅲ114	Ⅰ期	N4	黒褐色土
Ⅲ16	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ66	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ115	Ⅰ期	S2	黒褐色土
Ⅲ17	Ⅱ期	AY23e1	褐色砂質土	Ⅲ67	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ116	Ⅰ期	S4	黒褐色土
Ⅲ18	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ68	Ⅰ期	N4	黒褐色土	Ⅲ117	Ⅰ期	N4	黒褐色土
Ⅲ19	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ69	Ⅰ期	S2	黒褐色土	Ⅲ118	Ⅰ期	N1	黒褐色土
Ⅲ20	Ⅰ期	S4	褐色砂質土	Ⅲ70	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ119	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ21	Ⅰ期	N3	褐色砂質土	Ⅲ71	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ120	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ22	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ72	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ121	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土
Ⅲ23	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ73	Ⅰ期	N4	黒褐色土	Ⅲ122	Ⅱ期	AY22d5	黒褐色土
Ⅲ24	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ74	Ⅱ期	AY22d5	黒褐色土	Ⅲ123	Ⅰ期	N2	黒褐色土
Ⅲ25	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ75	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ124	Ⅱ期	AY22d5	黒褐色土
Ⅲ26	Ⅱ期	AY22d5	褐色砂質土	Ⅲ76	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ125	Ⅰ期	S2	黒褐色土
Ⅲ27	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ77	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ126	Ⅱ期	AY22d5	黒褐色土
Ⅲ28	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ78	Ⅰ期	南北畦	黒褐色土	Ⅲ127	Ⅱ期	AY23e1	黄色砂
Ⅲ29	Ⅱ期	AY22d5	褐色砂質土	Ⅲ79	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土	Ⅲ128	Ⅱ期	不明	攪乱
Ⅲ30	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ80	Ⅰ期	S4	黒褐色土	Ⅲ129	Ⅰ期	N1・S1	SX1
Ⅲ31	Ⅱ期	AY22c5	褐色砂質土	Ⅲ81a	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ130	Ⅱ期	AY22c5	SX2
Ⅲ32	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ81b	Ⅰ期	N4	黒褐色土	Ⅲ131	Ⅱ期	AY22d5	SX2
Ⅲ33	Ⅱ期	AY22d5	褐色砂質土	Ⅲ82	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ132	Ⅰ期	N1・S1	SX1
Ⅲ34	Ⅰ期	S1	褐色砂質土	Ⅲ83	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土	Ⅲ133	Ⅰ期	N1・S1	SX1
Ⅲ35	Ⅱ期	AY22c5	褐色砂質土	Ⅲ84	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ134	Ⅰ期	N1	黒褐色土
Ⅲ36	Ⅱ期	AY23d1	褐色砂質土	Ⅲ85	Ⅰ期	N1	黒褐色土	Ⅲ135	Ⅰ期	S4	黒褐色土
Ⅲ37	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土	Ⅲ86	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ136	Ⅰ期	N4	黒褐色土
Ⅲ38	Ⅱ期	AY23e1	褐色砂質土	Ⅲ87	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ137	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ39	Ⅰ期	東西畦	褐色砂質土	Ⅲ88	Ⅰ期	N3	黒褐色土	Ⅲ138	Ⅰ期	N3	黒褐色土
Ⅲ40	Ⅰ期	S2	黒褐色土	Ⅲ89	Ⅰ期	N4	黒褐色土	Ⅲ139	Ⅰ期	N4	黒褐色土
Ⅲ41	Ⅰ期	N4	黒褐色土	Ⅲ90	Ⅱ期	AY22c5	黒褐色土	Ⅲ140	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ42	Ⅰ期	S2	黒褐色土	Ⅲ91	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ141	Ⅰ期	N1	黒褐色土
Ⅲ43	Ⅰ期	S2	黒褐色土	Ⅲ92	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ142	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ44	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ93	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ143	Ⅰ期	S1	黒褐色土
Ⅲ45	Ⅰ期	S2	黒褐色土	Ⅲ94	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ144	Ⅰ期	N3	SP6
Ⅲ46	Ⅰ期	N2	黒褐色土	Ⅲ95	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ145	Ⅱ期	AY22c5	褐色砂質土
Ⅲ47	Ⅰ期	N4	SP2	Ⅲ96	Ⅰ期	S1	黒褐色土	Ⅲ146	Ⅱ期	AY23d1	黒褐色土
Ⅲ48	Ⅰ期	S4	黒褐色土	Ⅲ97	Ⅰ期	N3	黒褐色土	Ⅲ147	Ⅰ期	S1・2	褐色砂質土

4　歴史時代の遺跡

⑴ 古墳時代の遺構と遺物（図版58－３・４，図171・172）

ＳＤ１はⅠ期調査区西半で検出した溝状遺構。埋土は黒褐色の砂質土。北側が調査区外へと続いていることや攪乱により，全体の形状が明瞭ではないが，溝の幅３～４ｍで弧状にめぐるようである。円形にめぐっていたと仮定すると，外径16ｍ前後の周溝に復元できる。溝内部から，７世紀前半の須恵器・土師器が出土したことから，終末期古墳の可能性が高いと考える。

Ⅲ148～Ⅲ152はＳＤ１出土遺物。Ⅲ148は須恵器杯蓋。内外面ともに撫でて仕上げている。口径10.8㎝，器高3.3㎝。Ⅲ149は須恵器無蓋高杯。２方向透かしをもつが，貫通しておらず痕跡と化している。杯部には明瞭な段が２段見られる。口径10.9㎝，推定器高12.6㎝。Ⅲ150ａ・ｂは須恵器器台ないしは脚付壺の脚部であろう。胎土・焼成・調整から同一個体と判断した。内面は撫で調整，外面は櫛歯状施文具によるカキ目を施している。Ⅲ150ｂには透かしがはいる。Ⅲ151は土師器甕。口縁外側端部が直立する。内面は横方向の刷毛目，外面は縦方向の刷毛目で調整する。口径20.8㎝。Ⅲ152は須恵器横瓶か。短い口縁部が直立し，球胴，丸底となる。口縁端部を面取りしている。胴部内面は青海波叩きを残し，外面は平行叩きを施した後，部分的にカキ目調整を施す。推定器高40.6㎝，口径17.4㎝，胴部最大径46.1㎝をはかる。

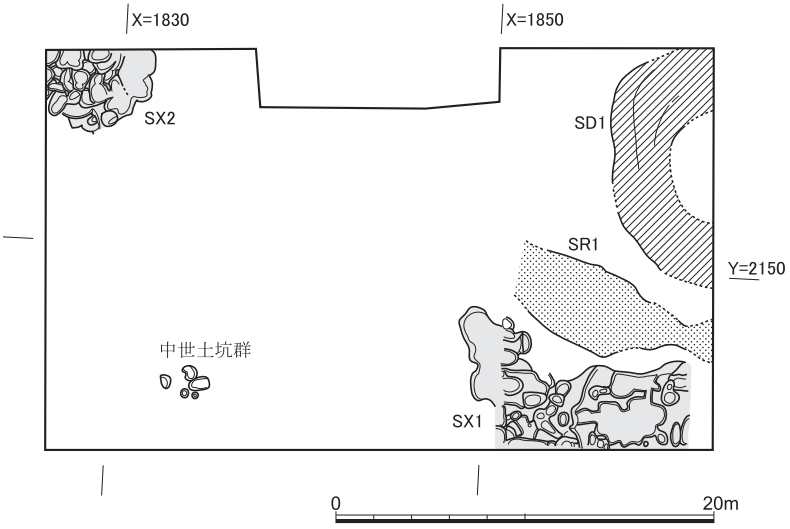


図171　歴史時代の検出遺構　縮尺1/400

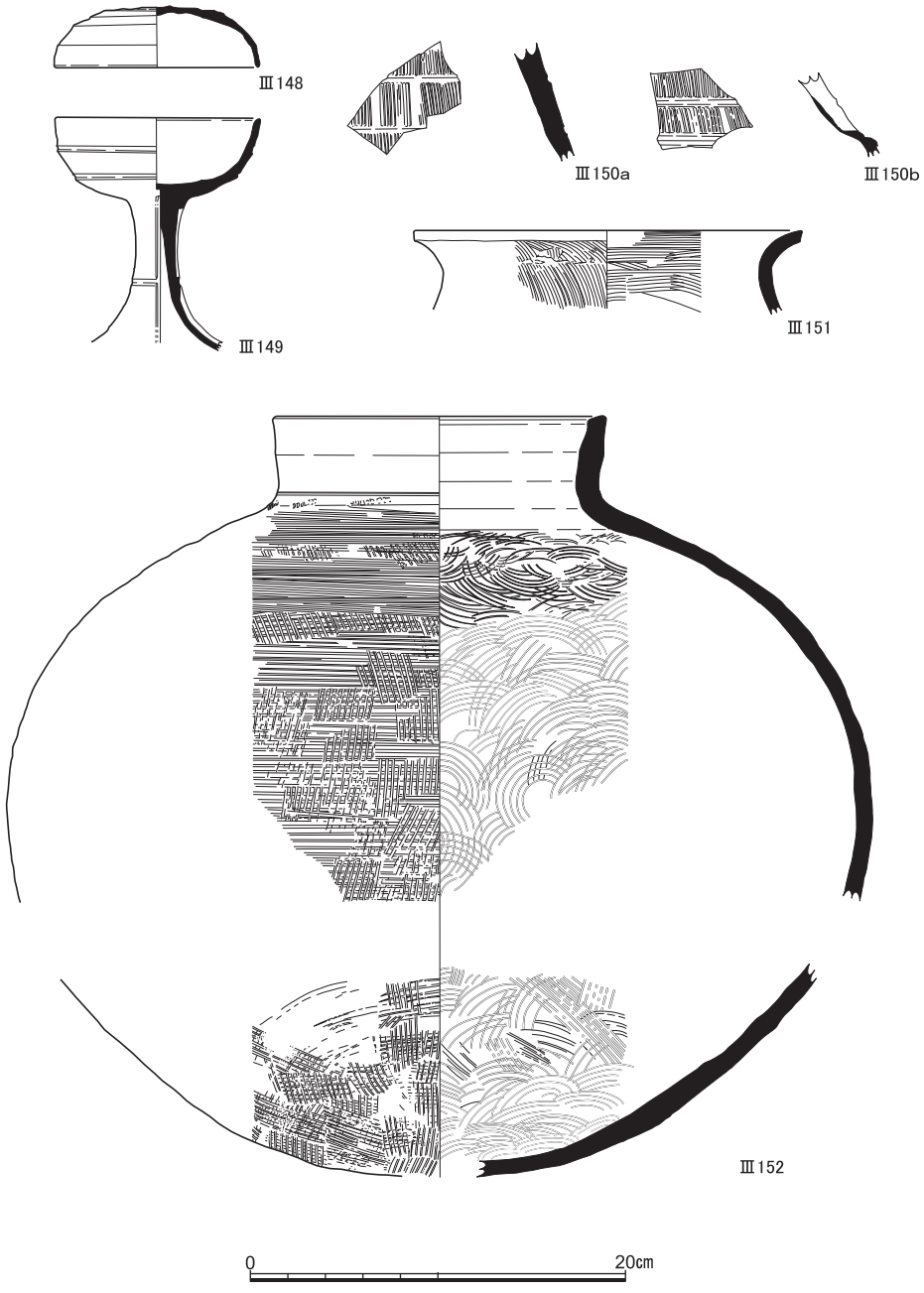


図172　ＳＤ１出土遺物（Ⅲ148～Ⅲ150・Ⅲ152須恵器，Ⅲ151土師器）

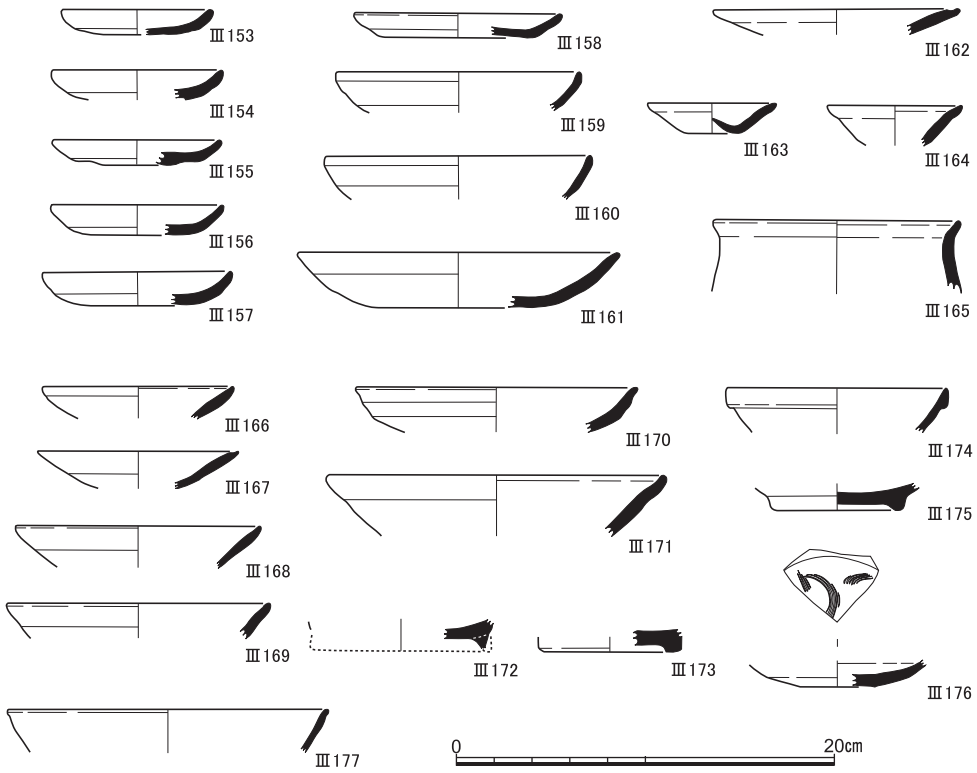


図173　ＳＸ２出土遺物（Ⅲ153～Ⅲ165土師器），ＳＸ１出土遺物（Ⅲ166～Ⅲ171土師器，Ⅲ172・Ⅲ173緑釉陶器，Ⅲ174～Ⅲ176白磁）

⑵ 中世の遺構と遺物（図版58－５・６，図173）

近世以降の開発のため，中世の遺物包含層の面的な広がりは確認できなかった。中世の遺物を含む茶褐色土の落ち込みとして，Ⅰ期調査区東辺，Ⅱ期調査区西南隅における不定形土坑（ＳＸ１・ＳＸ２）とⅡ期調査区東辺の小土坑群を発見するにとどまった。

ＳＸ１・ＳＸ２は大型の不定形土坑で，砂の採取を目的に掘削されたものと考えられる。ＳＸ１は第５層内で掘削が停止，ＳＸ２は第10層上面まで掘り込んでいた。

Ⅲ153～Ⅲ165はＳＸ２出土遺物。Ⅲ153～Ⅲ162は土師器皿。Ｄ類が多いが，Ｅ１類（Ⅲ161），Ｆ３類（Ⅲ162）も存在する。Ⅲ163は橙褐色，Ⅲ164は灰白色を呈する凹底小椀。Ⅲ165は土師器甕。口縁部内側をややつまみ出している。

Ⅲ166～Ⅲ177はＳＸ１出土遺物。Ⅲ166～Ⅲ171は土師器皿。Ｃ類（Ⅲ170），Ｅ類（Ⅲ168・Ⅲ169），Ｆ類（Ⅲ166・Ⅲ167・Ⅲ171）がみられる。Ⅲ172・Ⅲ173は緑釉陶器の底部。Ⅲ174～Ⅲ177は白磁。

ＳＸ１・ＳＸ２ともに古代以降の遺物を含んでいるが，もっとも新しい土師器の様相から判断して，中世後期の遺構と判断することができる。

5　土壌薄片観察と植物珪酸体・微粒炭分析

(1) 調査目的

今回の分析調査では，縄文時代晩期後半～弥生時代前期にかけて調査区の古環境に関する情報を得ることを目的として，堆積物の微細構造の把握と，植物珪酸体・微粒炭分析を実施する。

(2) 試　　料

試料はⅠ期調査区北壁東部の堆積物断面の５ｂ層～７層から，不撹乱柱状試料として採取された。試料採取地点の層相を試料および現地調査時の断面写真に基づいて，模式柱状図として図174に示す。第５層は白川扇状地扇端に広く分布する弥生時代前期の土石流堆積物である〔冨井ほか2007〕。土石流本体をなす細礫混じり粗粒砂～極粗粒砂からなる第５ａ層と，土石流に先行する洪水堆積物である極細粒砂～細粒砂混じりシルトからなる第５ｂ層に区分される。これら第５層の堆積断面では上位層準から連続する植物根痕などが確認される。第６層・第７層は，塊状をなす淘汰の悪い泥混じり細礫・中礫・泥混じり砂礫

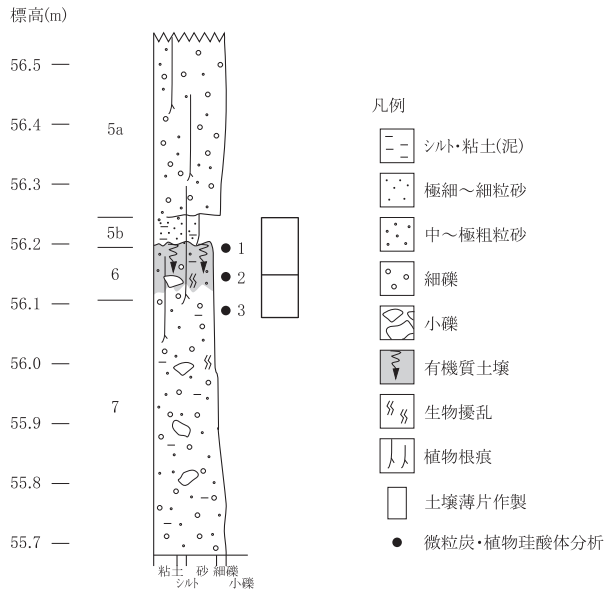


図174　調査地点の層序および試料採取位置

からなる。第６層は第７層と同様な成因の堆積物を母材として生成された土壌で腐植の蓄積が顕著である。発掘調査の結果，第６層上面で堆積斜面に対して横断方向の溝状の落ち込み，第７層上面で縄文時代晩期後半の住居跡などが確認されている。また，第７層からは縄文時代晩期中葉の遺物が出土しており，第７層の下位には縄文時代後期の遺物が出土する網状流路の一部をなしていた流路充填堆積物が確認されている。これらの遺物・遺構の検出状況から，第７層～第６層は縄文時代晩期～弥生時代前期にかけて形成されたことが推定される。

各分析は，採取された不撹乱柱状試料から，図174に示す層準について分析を実施する。土壌薄片は第７層最上部から第５ａ層にかけて作製・観察する。植物珪酸体分析・微粒炭分析は第６層上部・下部，第７層上部について実施する。

⑶ 調査方法

①土壌薄片作製鑑定

土壌薄片作成試料は，80℃ で１日間乾燥した後，樹脂（ペトロポキシおよびシアノボンド）で固化を行い，片面の研磨を実施した。固化および研磨済み試料は，スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後，反対側の面について厚さ70μｍ程度まで研磨を行い，カナダバルサムによりカバーグラスを接着した。なお，土壌薄片による層相や構造記載は，久馬・八木久訳監修（1998）の「土壌薄片記載ハンドブック」を参照した。

②微粒炭分析

微粒炭分析方法は，国内外の研究者間で手法がいくつかあるが，今回は植物珪酸体量との相関を見る目的で，植物珪酸体と同じシルト粒径の微粒炭を計測する手法をとった。また，花粉化石も分析対象とすることから，山野井（1996）の方法を改良し，処理を行なう。試料10ccを正確に秤り取り，重量を測定する。秤量した10ccの試料について水酸化カリウムによる泥化，篩別（0.25㎜），重液（臭化亜鉛，比重2.3）よる有機物の濃集，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理を行ない，有機物を濃集する。一定量採取しグリセリンで封じてプレパラートを作成する。このとき，堆積物１ccあたりの微粒炭量を求めるため，プレパラート作成に用いた残渣量等を正確に計測する。計数は，10～250μｍの微粒炭に関して個数を数え，1ccあたりの微粒炭量に換算して示す。なお，微粒炭量は花粉量に比べて桁違いに多いため，花粉化石を計数するにあたっては，微粒炭分析用よりも30倍程度の濃いプレパラートを作成し（試料３につ

いては，残渣が少なくすべてを用いた），検鏡する。また，特徴的な微粒炭（例えば木材組織をもつもの，植物珪酸体を含む組織片など）については特記事項として記載する。

③植物珪酸体分析

各試料の乾燥重量を秤量後，過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これの一定量をカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤（2010）の分類を参考に同定し，計数する。

分析結果は，堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）の一覧表，および層位分布図として示す。その際，100個/ｇ未満は「＜100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。

⑷ 結　　果

①土壌薄片観察

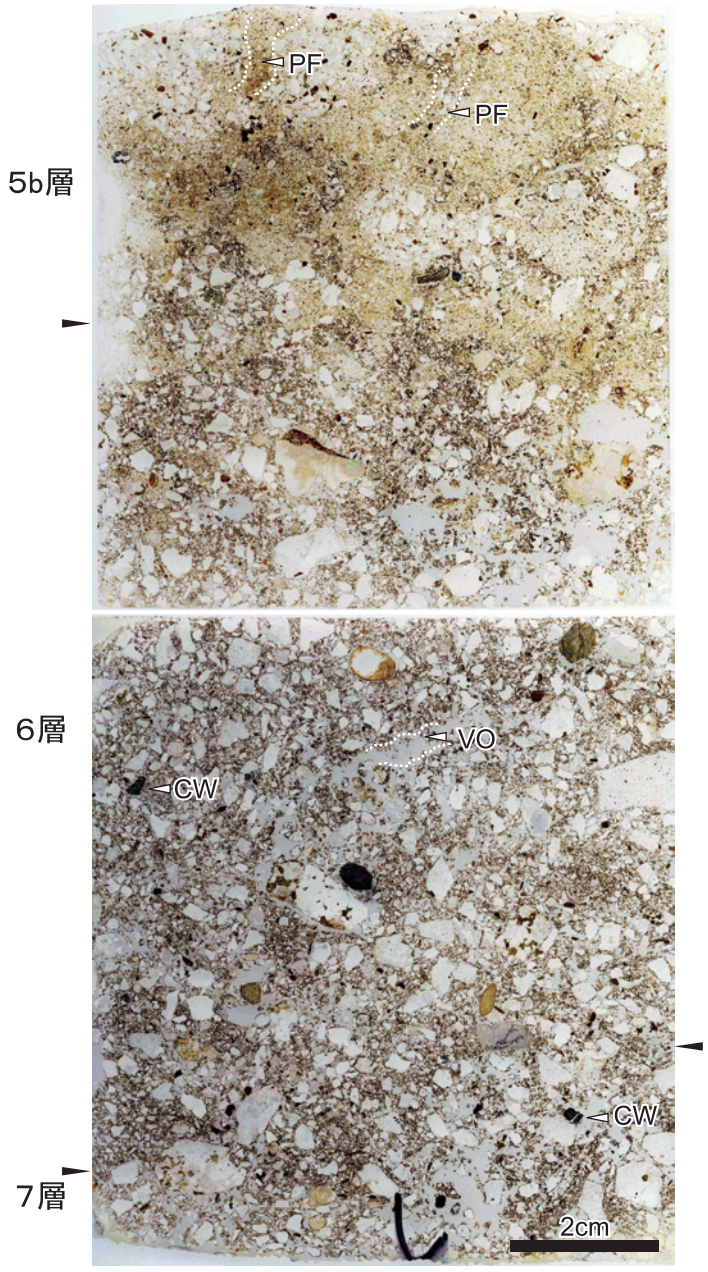
土壌薄片写真を図175に示す。薄片上端から45㎜の層準が第５ｂ層と第６層の層界に相当する。

第５ｂ層は，極細粒砂～細粒砂混じりのシルト層で構成される。これらの砕屑物には，配向性が認められない。層内には，第６層を起源とする礫質砂からなる直径10㎜前後の偽礫（クロッド）が多く含まれる。また，幅５㎜前後の砕屑物で充填された通路状ペドフィチャーが発達する。孔隙は，チャンネル孔隙とパッキング孔隙が多く分布しており，しまりが悪い。

第６層は，薄片作製地点において層厚110㎜を計る。本層は，極粗粒砂～細礫で構成され，最大礫径で中粒の中礫を含む。層内を構成する砂礫間には，腐植を主体とする細粒物質が充填する。本層では，パッキング孔隙を主体とする孔隙が発達しており，しまりが非常に悪い。粒団の発達は極めて不良である。また，層内には，わずかに炭化材片が含まれる。いずれも小口断面の組織が確認され，散孔材と判断される。また，第７層との層界は漸移的である。

②植物珪酸体分析

分析結果を図176に示す。各試料からは植物珪酸体が産出するものの，保存状態が悪く，



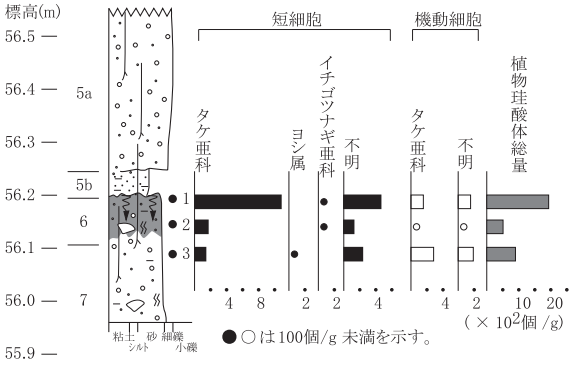
凡例
VO:孔隙，CW:炭化材片，PF:通路状のファブリック ペドフィチャー
写真は土壌薄片顕微鏡画像（下方ポーラで撮影）

図175　土壌薄片写真

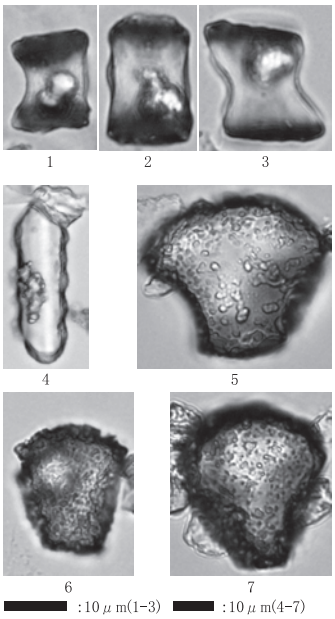
植物珪酸体含量

分類群	試料名 1	2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケ亜科	1100	200	100
ヨシ属	−	−	<100
イチゴツナギ亜科	<100	<100	−
不明	500	100	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケ亜科	200	<100	300
不明	200	<100	200
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	1600	300	400
イネ科葉身機動細胞珪酸体	300	200	500
総計	1900	500	900

数値は100単位に丸めた含量密度(個/g)を示す。<100は100個/g未満を示す



a)植物珪酸体含量の層位分布



1.タケ亜科短細胞珪酸体(試料1)
2.タケ亜科短細胞珪酸体(試料2)
3.タケ亜科短細胞珪酸体(試料3)
4.イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料1)
5.タケ亜科機動細胞珪酸体(試料1)
6.タケ亜科機動細胞珪酸体(試料2)
7.タケ亜科機動細胞珪酸体(試料3)

b)植物珪酸体写真

図176　植物珪酸体含量の層位分布および植物珪酸体の状況写真

表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量はいずれの層準も少ないが，層位的に変化し，第７層最上部（試料３）・第６層下部（試料２）では約900個/ｇ以下であるが，第６層最上部（試料１）で約1.900個/ｇと増加する。

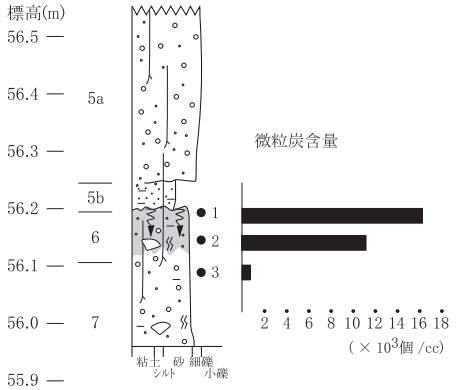
産出する種類構成は単調である。タケ亜科が比較的多く産出し，ヨシ属，イチゴツナギ亜科がわずかあるいは稀に産出する。栽培種のイネ属はまったく産出しない。

③微粒炭分析

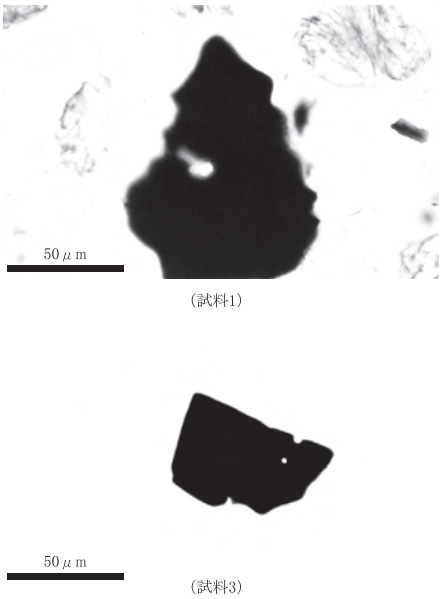
結果を図177に示す。微粒炭含量は，第７層最上部（試料３）が１ccあたり700個/ccであるが，第６層（試料１・２）ではいずれも，10000個/ccを超えており，10倍以上多い。また，第６層では，上部の試料１の方が下部の試料２よりも若干多い。微粒炭は，摩耗しているものが多く，黒ボク土などでみられる細長くてシャープな割れ口をもつ典型的な微粒炭ではない。また，由来がわかる組織をもつ微粒炭は認められなかったが，上記したよう

微粒炭分析結果

項　目	1	2	3
微粒炭			
微粒炭計測数	742	511	207
1ccあたりの微粒炭量	16300	11200	700
花粉化石			
スギ属	−	−	1
イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科	−	−	1



a)微粒炭含量の層位分布



b)微粒炭の状況写真

図177　微粒炭含量の層位分布および微粒炭の状況写真

に薄片試料中には第６層中・上部において散孔材の炭化材片がわずかに確認されている。

なお，花粉化石の産状は，第７層最上部（試料３）で針葉樹のスギ属，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が微量みられる程度である。産出化石の保存状態は悪い。

⑸ 縄文時代晩期～弥生時代前期の調査地点の環境

縄文時代晩期後半～弥生時代前期に形成された第６層は，肉眼観察では著しく擾乱された，腐植が集積する泥混じり極粗粒砂～細礫からなる。土壌薄片観察の結果，第６層内を構成する砂礫間に腐植を主体とする細粒物質が充填しており，この傾向が第６層上部に向かって顕著となることが確認される。また，粒団の顕著な発達は認められないものの，植物の根痕などに由来する生物擾乱の痕跡とみられる，パッキング孔隙を主体とする孔隙の発達が顕著であることも確認される。

自然状態で形成された土壌発達層準では，表層に向かって漸移的に腐植が蓄積される。今回の第６層もこのような特徴が確認されることから，第５ｂ層の洪水堆積物が流入する直前の調査地点は，土壌生成が進行する領域であったと推定される。第６層中の孔隙には上位層準より連続するものも認められるが，多くは第６層最上部から下方にかけて発達している。これらのことから，調査区では第６層上部形成期に植生が発達し，土壌生成が進

行したことが窺える。なお，第６層土壌の母材となった堆積物の成因は，土壌生成時の擾乱によって初生の堆積構造が乱れているため不明であるが，構成する砕屑物の粒度や発掘調査時の遺構の検出状況などを考慮すると，第６層は土壌生成期間中も洪水等による堆積物供給を受けて，上方付加しながら発達した累積性の古土壌の可能性もある。この点については調査区の地形発達を踏まえた評価が必要である。

一方，第６層の植物珪酸体含量密度は，京都大学北部構内ＤＢ28区地点の同時期の古土壌の植物珪酸体分析結果〔冨井ほか2007〕に比較して，含量が著しく少なく，産出する種類構成も単調であることが認識される。このような地点間での含量密度や産出種類の違いは，各地点における土壌生成期間の違い，それによる植物珪酸体蓄積量の違い，局所的な植生の違いなどに起因する可能性がある。両調査区における土壌生成期間が同じだった場合，今回の調査区の方がイネ科植物など植生の発達が貧弱であったことになる。

今回の調査区の植物珪酸体含量密度は低いが，第６層単層内での層位的な変化をみると，第６層形成期を通じて植生の発達状況が一様でなかったことが推定される。含量密度は第６層最上部でもっとも高くなることから，調査区が植生に覆われるようになったのは第６層最上部形成期の可能性が高い。増加する種類はタケ亜科である。タケ亜科には，開けて乾いた場所や，林縁や林床などに生育する種類を含む。植物珪酸体の保存状態が悪く，種類を特定できなかったものの，第６層最上部形成期には，ササ類などのタケ亜科植物が生育するようになり，植物珪酸体が蓄積したと考えられる。なお，タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く，また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており〔近藤1982，杉山・藤原1986〕，他の種類よりも残留しやすいことが知られている。そのため，実際の周辺植生の量より，過大に評価されている可能性があることを考慮しておく必要がある。

また，第７層～第６層の微粒炭含量は，植物珪酸体含量と同様に他地域で行われている微粒炭分析結果と比較して，著しく少ないことが認識される。層位的変化をみると，第７層上部から第６層下部にかけて急増し，第６層上部に向けて漸増している。この増加パターンは，上記の植物珪酸体の増加パターンと異なっている。微粒炭の増加は第６層下部から始まっており，下部形成期には微粒炭の供給量が増加する何らかの事象が起こっているていることが示唆される。微粒炭の生成は，自然状態では山火事などの燃焼のほか，野焼きやなどの人間活動にも由来する。先述したように発掘調査では，第７層上面で縄文時代晩期末の遺構が検出されている。第６層下部での微粒炭の増加は，このような人間活動

に起因する可能性が高い。ただし，微粒炭含量は低いことから，野焼きなどの燃焼行為が頻繁に行なわれていた状況は考えられない。なお，微粒炭分析時に抽出された有機物遺体には花粉化石がほとんど含まれていなかった。これは花粉・胞子が土壌生成が進行する好気的状況下において，分解消失することからみて同調的な変化とみられる。

以上述べてきた各分析結果を複合的に捉えると，第６層形成期の調査区の環境は次のように変遷した可能性が考えられる。第６層下部形成期はイネ科草本植生などの発達は貧弱であった可能性が高く，相対的に植生の発達が顕著となるのは第６層上部形成期とみられる。これに対して，微粒炭の層位分布から，調査区近辺において人間活動がみられるようになったのは第６層下部形成期と推定される。すなわち，調査区への縄文時代晩期後半の人間の進出は，第６層下部形成期の植生未発達の段階であったことが示唆される。また，第６層上部形成期には，調査区は土壌生成が進行する領域に変化しているが，これは何らかの理由により人間活動領域として不適な場所に変化し，植生に覆われるようになったことを示している可能性がある。

６　小　　結

⑴ 縄文時代～弥生時代前期の地形環境

遺跡の基盤をなす黄褐色シルト（第10層），白色砂礫（第11層）からは遺物が出土していないので，その形成時期を特定することはできない。黄褐色シルトをきって形成された自然流路ＳＲ２・３は，ともに北東から南西方向へ流れた白河系流路である。縄文後期前葉の遺物を含んでいるので，その頃の堆積物であると考える。医学部構内から病院構内にかけても，ほぼ同時期の白川系流路が複数見つかっている。この頃，扇状地上に網状流路が活発に形成されたことを物語る。

自然流路ＳＲ２・３を覆って調査区全域に広がる褐色砂質土は，その上面から晩期中葉の土器が出土しており，これより新しい遺物は包含されていなかったので，その頃までの堆積物であると判断できる。それまでと同様，白川系流路の影響を受ける不安定な環境であったことがわかる。

このような状況が一変するのが，その上位に堆積する黒褐色土（第６層）である。腐植に富んだ土壌化層で，離水し安定した環境が形成されたことを示している。こうした腐植土層は北部構内から本部構内・吉田南構内まで広い地点で確認できることから，白川系流路の固定化が進行した結果，それまで河川の影響を受けていた広い土地が離水して安定化

したことが考えられる。黒褐色土の形成時期については，多くの地点で上部を黄色砂（第５層）が覆っており，これが弥生前期末の洪水性堆積物であることが判明しているので，下限年代の一端が明らかになっているが，上限年代については十分なデータが得られているとはいえない。今回の調査で下層の褐色砂質土上面から縄文晩期中頃の土器が出土したことは，少なくとも本地点における黒褐色土の形成が縄文晩期中葉以降であることを示した点で重要であろう。

黄色砂に覆われた黒褐色土上面は，弥生前期末の地表面である。全体として，北東に高く南西に低い地形面を呈する。土石流の通過痕跡と想定できる凹みのほか，Ⅰ期調査区西半で南東－北西方向に伸びる２筋の溝状落ち込みを検出した。土石流の走向にほぼ直行することから巨礫の通過痕跡と考えるには疑問点もあるが人為的な遺構とも断定しがたい。弥生時代の遺物がほとんど出土していていないことや，植物珪酸体・微粒炭分析が人間の活動地点としては不適当な場所という結果を示していることも，人為的な遺構とするには躊躇させる点である。周辺地区での調査をまって再考したい。

なお，本調査区の西に隣接する60地点や南南西50ｍの272地点では，黄色砂をきって形成されている高野川系流路の攻撃面が検出されているが，本調査区および北に隣接する321地点では，こうした攻撃面は検出されていない。弥生中期以降の高野川系流路は本調査区まで及ぶことはなかった。

⑵ 縄文晩期の住居遺構

今回の成果でもっとも特筆できるのが，Ⅰ期調査区東半で検出された縄文晩期の住居遺構である。２間３間の長方形住居１軒（ＳＢ１），円形住居２軒（ＳＢ２・３）を認めたが，Ⅰ期調査区西半にも多数のピットが見つかっているので，さらに住居が存在した可能性も指摘できる。

時　期　遺構が構築された地層である黒褐色土は，縄文晩期中葉以降弥生前期末までに限定できる。862点出土した黒褐色土出土遺物のうち，もっともまとまって出土した遺物は縄文晩期末の長原式土器で，弥生前期と断定できる遺物は壺形土器の胴部の細片が１点出土したのみであった。また，遺構は褐色砂質土上面で検出しており，黒褐色土上面に構築されたものではなく黒褐色土中に構築されたものと理解している。柱穴や炉跡から時期の特定できるような遺物は出土していないが，以上のような遺物出土状況，遺構検出状況から，これらの遺構は縄文晩期末の長原式のものであると考える。

出土した長原式は，典型的な長原式が主体を占めるが，口縁部分類ｄ類・ｅ類とした長

小　　結

原式新相ないしは長原式直後の土器が各１点出土している。これらがそれ以外の長原式と共伴しているのかどうかは，出土状況からは判断できない。

いずれにしても，縄文晩期末の長原式がまとまって出土したのに対して，弥生前期土器がまったくと言ってよいほどみられないという出土状況は強調してもよいだろう。少なくとも京都盆地東北部のこの地では，両者に年代的な隔たりがあることを想定させる資料となるからである。

なお，浮線網状文土器の離山式に比定できる土器は，小片ではあるけれども，出土状況からは長原式に伴なった可能性がもっとも高い。当該期の広域編年構築のための重要な資料となろう。

構　造　　ＳＢ２・３は，褐色砂質土上面で検出した柱穴の並びから復元しており，黒褐色土掘削中に掘り方を確認することはできなかった。黒褐色土中で面的な精査をおこなってはいないので，掘り込みがなかったと断定することはためらわれるが，長方形を呈するＳＢ１については，褐色砂質土上面に近い黒褐色土下位で検出した炉跡（焼土）と同一面で柱穴の検出がなされたことから平地式住居の可能性が高いと理解する。

これに対して，円形を呈するＳＢ２・３は炉跡を確認できておらず，掘り込みがあった可能性は排除できない。長方形（ＳＢ１）が平地式，円形（ＳＢ２・３）が竪穴式という理解もできる。ただし，掘り込みがあった場合でも，削平を受けていない黒褐色土の層厚から，20㎝に満たない浅いものであったことは確実である。

ＳＢ２は柱穴が密集しているので，建て替えが行われた可能性もある。さらにＳＢ２とＳＢ３は最短の柱穴の距離が１ｍしか離れておらず同時に存在した可能性は低いように思われる。並びの復元できなかった柱穴も存在するので，１時期数軒で，少なくとも２時期にわたって住居が構築されたと考えておきたい。

意　義　　縄文晩期後半の居住地は，北部構内の北白川追分町遺跡や吉田南構内の吉田二本松遺跡などを想定してきた。こうした遺跡では，弥生前期の遺物あるいは遺構も同時に見つかっていること，扇状地の微高地上に占地していることが特徴である。

これに対して，今回の調査は，従来予想していなかった扇状地末端の低地部まで縄文晩期人が進出していることを明らかにするとともに，弥生前期の活動痕跡を伴わないという従来とは異なる調査成果をもたらした。土壌薄片観察および植物珪酸体・微粒炭分析からは，この地が離水して安定化しつつもイネ科草本植生などの発達がまだ貧弱であった時期（第６層下部）に，縄文人が進出していること，そして人間の活動が希薄になった第６層

上部において，植生の発達が顕著になっているという結果が得られている。ただし，第６層下部における微粒炭の量では，野焼きなどによる燃焼行為が頻繁におこなわれたとは考えにくい。したがって，縄文人が意図的に人工空間を作り出してそこに進出したというよりも，自然の遷移のなかで作り出された裸地に近いような場所を選択して進出してきたことを想定させる。

このような低地への進出の理由の一つとして考えられるのは水稲耕作であるが，植物珪酸体分析ではイネ属の珪酸体はまったく出土していない。この事実がこの時期の稲作生産否定の根拠となるのか，単に居住地と生産域の違いを示しているだけなのか，どちらの可能性も排除できないと考える。いずれにしても，この地における縄文から弥生移行期における縄文人の行動を探るうえで重要な資料をもたらしたといえよう。

今回の調査でみつかったような縄文晩期～弥生前期の平地式住居は近畿地方で類例が増えつつある。奈良県観音寺本馬（京奈和観音寺Ｉ区）遺跡では，晩期中葉の13軒の平地式住居が確認されている。平面形が円形を呈するものが多いが，方形を呈するものもあり，すべて地床炉をともなっている〔本村2009〕。大阪府弓削ノ庄遺跡では，長原式を主体に弥生前期土器を少量含む地層から長方形平地式住居が４軒見つかっており〔島崎・田中・鬼頭編2005〕，また大阪府讃良郡条里遺跡では弥生前期最古段階の円形平地式住居５軒の報告があり，縄文的な住居構成を残していると考えられている〔中尾・山根編2009〕。

一方，晩期中葉の京都市上里遺跡〔高橋ほか2010〕や晩期後葉の長原遺跡〔永島ほか1982〕，弥生前期の美園遺跡〔渡辺ほか1985〕などのように，竪穴式住居から構成される遺跡も存在しており，この時期の住居がすべて平地式にとってかわったわけではない。竪穴式と平地式の差は，機能差なのかあるいは集団の系統的な差なのか，また長方形と円形にはどのような差異があるのか。近年明らかになりつつある近畿地方の縄文晩期から弥生前期にかけての住居構造を追究するうえで，本資料は貴重な類例となるだろう。

⑶ ７世紀の溝状遺構について

Ｉ期調査区の西半でみつかった溝状遺構ＳＤ１は，溝幅３～４ｍで弧状にめぐっており北側が調査区外へと続いていた。仮に円形にめぐっていたとすると，外径16ｍ前後の周溝に復元できる。この溝の底に近い部分から，須恵器の杯蓋・高杯・横瓶？および器台あるいは脚付壺の脚部片と土師器甕が出土した。須恵器はその特徴から判断して，陶邑編年のＴＫ209～ＴＫ217型式〔田辺1966〕，岩倉編年の岩倉Ｉ段階〔宮本1992〕ごろに比定でき，７世紀前半のものであろう。土師器甕の年代も矛盾しないと理解する。

小　　結

以上から判断して，溝状遺構ＳＤ１は溝の外径16m前後の終末期古墳の周溝の一部である可能性が高いと考える。

終末期古墳の可能性が指摘される遺構は，本調査区から南東150mの221地点でも検出されている。西側が攪乱で欠損するが，外径15m前後の円形の周溝に復元されている。埋土から７世紀台の須恵器が出土していることから，終末期古墳の周溝の可能性が指摘されている〔千葉1997〕。このほか，221地点の東に隣接する230地点では，７世紀前半の完形の須恵器蓋杯がセットとなって出土した土坑が２基見つかっており，墓坑と理解されている〔古賀1999〕。また230地点の南側の271地点でも，７世紀前半の須恵器の出土した溝が確認されている〔千葉2003〕。さらに本調査区の南300mの277地点でも，時期の特定できる遺物が出土していないものの，外径12m前後の円形に復元できる溝がみつかっており，終末期古墳の可能性も考えられている〔千葉・阪口2006〕。

このように本部構内の各所からは，７世紀前半台の古墳あるいは墓地に関係すると思われる遺構が複数見つかっており，今回検出した溝状遺構もこうした類似遺構の広がりのなかで理解することができるだろう。

周辺地区に目を広げてみると，本調査区から500m南の吉田南構内の西辺では，５世紀後半の方墳が集中して見つかっている〔伊藤2010〕。また今出川通りをはさんだ北側の北白川追分町には，実態は不明であるものの横穴式石室をもつ古墳が存在したらしい。〔京都市文化市民局2007〕扇状地の東西に延びる尾根筋上（微高地上）に，時期ごとに尾根筋を変えつつ墓域が展開していた状況を想定することができる。主体部が遺存している例は，今後ともほとんど期待できないであろうが，周溝の存在から群構成などを復元できる可能性もあろう。周辺地区の今後の調査を期待したい。

発掘調査と資料整理は千葉豊が担当し，発掘と整理を通じて，磯谷敦子・長尾玲・中西常雄・中西聡子・西田絢・結城葵・曽根茂が測量・実測などの作業にあたった。本章の記述は，第５節を辻本裕也に依頼したほかは，千葉豊がおこなった。また，縄文時代の遺構・遺物について泉拓良氏（本学文学研究科），浮線網状文土器について中沢道彦氏（長野県農政部），出土石器について大下明氏（雲雀丘学園高等学校）・上峯篤史氏（同志社大学）から，貴重なご教示をいただいた。末尾ながら記して，感謝申し上げます。